



TITLE:

清代銅・鉛鑛業の構造

AUTHOR(S):

里井, 彦七郎

CITATION:

里井, 彦七郎. 清代銅・鉛鑛業の構造. 東洋史研究 1958, 17(1): 61-96

ISSUE DATE:

1958-06-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/148098>

RIGHT:

清代銅・鉛鑛業の構造

里 井 彦 七 郎

目 次

まえがき

一、爐戸（爐民）と爐丁

二、「商」（官商・部商・礦商）と「客販」

三、「頭人集團」

四、投資家集團と採掘労働者

まえがき

私は先に、ほゞアヘン戦争までの清代銅・鉛・銀鑛業について考えたが（①「清代鑛業資本について（上）」——「東洋史研究」十一、一、一九五〇・九、一九五〇・九、一一九）（②「中國鑛業」——平凡社「世界歴史辭典」、鑛業の項、一九五一年）（③）は未完であり、（④）は辭典原稿であつて、多くの問題を残したまゝになつてゐる。亦、その後、新中國で、いわゆる資本主義萌芽問題に關連して、注目すべき諸論文が發表され、個々の點はとも角、發展的に捉えるという點で、教えられる所が多かつた。そこで、舊稿の不足を補い、誤つてゐる

と考えられる點を補正しつつ、清代——やはりほゞアヘン戦争までの、銅・鉛鑛業を再論したいと思う。とくに、舊稿では、この期の民營の發展、賃労働の析出を確認しながら頭人集團の強力な寄生的作用、清朝國家權力のきびしい収奪などを重視し、むしろ、これらの阻止的要因に重點を置いて考察した事に、深い反省を加えねばならない。確かに、それらは、鑛業の發展に對する阻止的な力であつたが、そうした重壓の中で、明代以來、明確に民營の方向をたどり始めた（註①）白壽彝氏論文）鑛業が清代においてどの様に發展したかという事こそ、重要なのである。たゞ本稿では、その點に關して、なお十分に取り扱うことが出来なかつた。主として許された枚數の關係だが、發展のし方については、別稿「清代銅・鉛鑛業の發展」——で改めて取り上げる事にし、本稿では、その前提として、銅・鉛鑛業構成の諸要素

と、その相互關係について、全く構造的に考察する。對象は主として、雲南・湖南兩省の銅・鉛（白鉛・黑鉛）鑛業に限った。前者は明末以來、特に清初—康熙・雍正時代—急速に開發されたいわば新開の清代隨一の鑛產地であり、後者は、宋代以來の傳統を持ち、清代も「八寶地」と稱され、これ亦、重要な白・黑鉛・銅產地であつたから、この期の銅鉛鑛業生産關係は、兩省のそれを説明する事によつて、はゞ明らかにされ得ると思う。なお、舊稿、本稿、別稿の諸史料については、東洋文庫、東大東洋文化研究所、天理圖書館の方々、とくに西嶋定生氏の御厚情を受けた。

註

(1) 白壽彝氏「明代礦業的發展」『北京師範大學學報』一九五六年第一期—（三聯書店五七年三月刊）「中國資本主義萌芽問題討論集」下卷所収。王明倫氏「鴉片戰爭前之雲南銅鑛業中的資本主義萌芽」『歷史研究』一九五六年第三期。嚴中平氏「清代雲南銅政考」『中華書局』一九五七年十月刊。鄧拓氏「從萬曆到乾隆」『歷史研究』一九五六年第十期。劉耀氏「十九世紀七八十年代南昌杭州兩箇城市錫箔業中的資本主義關係」『史學集刊』一九五七年第一期。

(2) 拙稿(1)參照。

一 爐戸—爐民と爐丁

王明倫氏が、雲南銅鑛業の發展をさぐる過程で、「硃」或いは「尖」が基本的生産單位であると論斷した事は、その生産關係が複雑多岐であるだけに、注目すべき見解であつた。

だが、硃・尖はあくまで、採掘過程の生産單位であり、それらを銅鑛業全體の單位と解する事は出来ない。何故なら、當時の鑛業生産は原則的に、採掘と冶金の兩部門に分離しており、前者の主體が、尖戸・磗戸・硃民・硃戸・坑戸等とよばれた採掘業者であるのに對して、後者の主體が「爐民」「爐戸」とよばれる冶金業者であり、兩者の間に鑛石賣買關係が結ばれていたからである。この事は拙稿(1)で論及したが、當面、雲南諸鑛業に關する一等史料である「滇南鑛廠圖略」(以下「圖略」と略稱)を引いておく。「廠衆有硃民・爐民・商民之分。……買鑛煎銅出售、爲爐民・爐戸」(同書「附銅政全」)「按凡廠初開、立規爲要。旺后入衆、各從其類。爐丁趨爐、以爐戸招納之」(同上)。—雲南銅鑛業において、採掘業者たる硃民から鑛石を買い、煎煉して賣るのが、精煉業者—爐民・爐戸であり、彼らが爐丁(冶金勞働者)を雇傭していたことは明らかであろう。もち

ろん、厚賃を擁した商人や頭人集團によつて兩生産過程が統一される事もあり(二章註⑩及び別稿参照)、逆に、「殷實の爐戸」が採掘業に投資している事は否定出来ない(本稿80頁参照)。しかし、それは兩業分離の發展過程であり、構造的に先ず生産關係を明らかにしておこうとする吾々には、原則としてこの兩業の分離を確認しておかねばならぬ。重ねて云えば、精煉過程の基本的生産單位は「爐」であり、その主體が「爐民」であつた。

では、彼らはいかなる歴史的役割と特徴を荷つており、亦他の生産諸要素といかなる關係にあつたらうか。

第一に、彼らは、明初以前の「官廠」における精煉主體と違つて、基本的生産手段たる爐を所有する私的業者であり、亦、製品を賣ることを目的に生産する、私の商品生産者であつた。雲南の爐民が硃民から鑛石を買い、製品を「買售」した所からだけでもその事は確認されようが、地方官が「至煉銅爐戸、與煉鉛爐戸、雖名不同、計利則一。況燒煉銅鉛火工(資本のこと)、即有多寡、價值亦貴賤。爐戸、砂夫驗砂定價、公平交易。煎煉銅斤、除抽課外、照例給價、原與煉鉛爐戸一律。利之所在不能強之以不煉。利之不在、亦

不能迫之必煎。……」

(「湖南省例成案」卷十二「戶律倉庫錢法、辨理鑛廠各條規」)

と認めざるを得なかつたように、湖南の銅・鉛爐戸達も、採掘業者と鑛石を交易する關係に立つた商品生産者であつた。

—(以下「湖南省例成案」を「成案」と略稱する)

第二の特徴は、小規模ながら、すでに、賃銀労働者を雇い、明確に冶金企業家に上昇している爐戸と、なお、小商品生産者にとどまつてゐる爐戸とが並存していて、爐戸内に階級分化が始つてゐた事である。次表(一)の乾隆時代の湖南桂陽州白鉛爐戸は、前者の適例である。

〔表一〕—湖南、桂陽州白鉛爐戸生産費表—

(「成案」戶律倉庫卷十二、「辨理鑛廠各條規」により作製)

(1)		價格
生 産 費	上砂	20斤……………8分
	中砂	50斤……………1錢
	下砂	130斤……………1錢2分
	石炭	……………1錢8分
	爐頭一人への工價銀	……………4分
	小工二人への「計	……………3分
	以上三人への飯食銀	……………6分
	挑砂銀	……………4分
	鑛子、鐵蓋の添補費	……………2分
	計	6錢7分
産出額……………		19觔
抽稅額……………		1觔10兩7錢
殘額(餘鉛)……………		17觔5兩3錢
餘鉛上價(100觔ヲ4兩トシテ)……………		6錢6分3厘
純益……………		2分3厘

(2)

生 産 費	内 譯	上 砂 100斤..... 4 錢 中 砂 100斤..... 2 錢 石 炭..... 1 錢 8 分 5 厘 爐頭一人への工價銀..... 4 分 小工二人への工價銀 計 3 分 以上三人への飯食銀 計 6 分 挑砂銀..... 4 分 鑽子、鐵蓋の添補費..... 5 分	價格
	計	1 兩 5 厘	
産出額.....		30 觔	
抽説額.....		1 觔 10 兩 7 錢	
殘 額 (餘鉛)		28 觔 5 兩 3 錢	
餘 鉛 實 價		(100 觔ヲ 4 兩 ト シ テ)	1 兩 1 錢 3 分 3 厘
純 益		1 錢 2 分 8 厘	

備考 (1)は爐戸自身の計算、(2)は監督官の報告。ともに爐戸一人の一日の生産規模を示すもの
——拙稿(1)参照——

即ち彼らは爐頭一人、小工二人、挑砂夫(採掘場から礦石を運ぶ人夫)を雇傭し、一日約一兩五厘、月に三十兩以上の資本を運轉する小企業家であつた。

これに對して、綠紫崗廠と共に湖南の銅産の中心的地位を占めた石壁廠の銅爐戸の如きは、鑛區附近に密集して作業場を持つてゐるのではなく、鑛區から十里、數十里も離れた數ヶの農村に散在し、鑛石を買つて歸つて、「就家室」即ち、自宅で——恐らく家族労働によつて——銅を燒煉した、

いわば農村内に擴散した小商品生産者であつた。⁽³⁾ 郴・桂兩州の黒鉛爐戸も、黒鉛鑛石から、たゞちに、淨鉛・淨銅を生産するのではなく、鑛石から不純な「毛鉛」を生産して、「商」乃至「客販」(この兩者についで、⁽⁴⁾「毛鉛」を買つて、淨鉛・淨銅を生産する爐戸とに分れてゐた。こうした爐戸の小商品生産性、小規模生産性は彼らに國家權力や「商」「客販」に何らかの形で從屬させる一要因であつたが、舊稿(1)(2)のように、餘りにも彼らの、生産の小規模性にのみ視點を定め過ぎることは、歴史的な捉え方ではない。宋代に、それ以前の賤民から獨立の冶金業者に成長し、(舊稿(1))その後、上昇、發展してまがりなりにも賃労働を収取するに到つた爐民、及び、なお農村に散在しつつ、「家室に就て」生産する小商品生産者たるにとゞまつていた爐戸——この階級分化を確認しなければならぬ。現に、右に引いた石壁廠の擴散爐戸達にしても、一爐五十兩の爐を私有したのであり、一般に湖南で、「清初、銀價至貴の時、二十兩が中人一家の産」⁽⁵⁾と稱された事情を考え合わすと、月に三十兩以上を運轉した「表一」の爐戸は勿論、五十兩の爐を所有した農村擴散爐戸でさえ、可成りの財産

を所有した獨立、自營の商品生産者であつたのである。石壁廠以上に、湖南銅產の中心地であつた綠紫坳の銅爐戸は、乾隆17年頃、五十七家が採掘場附近に密集して、一つの鑛業町を形成し、彼らの生産規模は、石壁爐戸に較べて遙かに大きく、湖南省鑛錢局（寶南局）に必要な銅の大半を生産していた。だが、爐戸達が、宋代以來、上昇をつゞけ、家に就いて燒煉する爐戸達でさえ、中家の産に匹敵する業者に成長して來たという事は、彼らが何の障害もなく、發展し得た事を決して意味しない。

清代中國隨一であつたと思われる雲南の銅爐戸でさえ、「爐戸・砂丁、類皆貧民、不能自措工本。頼有預領官銀、資其攻採」⁽⁸⁾と云われ、湖南でも亦「查煉銅爐戸、毎戸挾本俱屬無多」⁽⁹⁾と稱されたように、彼らの生産資本は決して豊かではなかつた。事實、彼らは地方政府から「工本」（生産資本）の前貸を受ける事が多かつた。雲南の場合は、それが定則化されており、湖南の場合は雲南のように定則化されていなかつたが、むしろ前貸が強制されていた重要な事例がある⁽¹⁰⁾。亦、地方政府から前貸を受けなくとも、「商」や「客販」から、買鑛資金その他の生産費を借りるのが一

般的であつた（後出）。そこから亦、精煉過程の基本的生産單位であつた爐戸達と、「商」や「客販」との間に大きい矛盾が産み出され、とくに、國家權力から、絶大な収奪を蒙らねばならなかつたという、彼らの第三の特徴が産み出される。何故なら、地方政府の資金前貸は、原則として、生産物の全部（銅爐戸の場合）、或いは重要な部分（白黑鉛爐戸）の強制買上げ、而も極めて高い収取率を伴つた買上げを前提としたからである（別稿参照）。それは爐戸達の國家權力による國內市場からの強制的遮斷を意味し、商品生産者に上昇して來た彼らが、そのような歴史的な矛盾を内包していたことに注意しておこう。

第四に、當然、彼らは、商品生産者としての法則的な諸制約を免れない。たとえば、當時の鑛場は概ね、國內市場から遠い僻地にあり、經濟的政治的地位の低さから來る彼らの弱さは、遠隔の市場と自力で結合する事をきわめて困難にさせた。それ故、「商」乃至「客販」の手を通じて市場と結合しなければならなかつたという、流通面の特色が産み出されて來る⁽¹¹⁾。而も彼らは依然として、本質的には商品生産者であり、たとえば、鑛石は勿論、鑛石以外の諸物

資―特に、食糧や燃料（多く木炭）を、官から供給されるのでなく、自ら、他から購入しなければならない。燃料の重要性については、殿中平氏も論及している所だが、今、光緒十六年の雲南銅爐戸の例―爐十七を動用して、銅一萬斤を生産する際の―生産費表を示そう。光緒時代の例であり、本稿が直接対象とする時期とは多少ずれるが、ほゞこの問題のあり方を示してくれると思う。

〔表二〕―雲南銅爐戸生産費表―

礮	石	10 萬斤	600 兩	40 %
炭		12 萬斤	840 兩	56 %
人件費	延136人	60 兩	0.4 %	
(3 晝夜)				

この場合の、炭の費用は全費用の56%を占めたのである。もちろん、冶金業開始期には、安い良質の炭を豊富に入手出来るのが通例であつたが、時の経過と共に、燃料の騰貴することも亦、通例であつた。そして、冶金業の開始、發展―木炭の商品化は、山林所有者たる地主と佃戸との間に、新しい對立を生み出すと共に、安い木炭の獲得をめぐつて、冶金業者間にも競争が惹起される。木炭の賣り手は、當然、高く買う冶金業者に賣ろうとし、反面、資金に乏し

い冶金業者は、購入競争を通じて一層騰貴する燃料費に悩まされねばならない。こゝで提出した問題は、燃料に限られるが、それを通じて吾々の知り得ることは、商品生産者たる爐戸は、やはり商品經濟發展の法則に支配されねばならぬという嚴然たる事實である。それ故に亦、市場を遮斷しようとする國家權力に對抗し、自らの生産物を高く私賣する事によつて、經營の發展をとげようとする彼らの本來的法則的な努力と闘いも産み出されるのである。

それと關連して、第五に、爐戸は、鑛石を賣買する硐民達とも矛盾した關係に立つ。前者が安く買おうとすれば、後者は高く賣ろうとする競り合ひの關係にあつた事は當然だが、私の見た限り、硐民はその背後に、合夥投資家集團を持ち、經濟的にも比較的優位に立つたことを反映して、爐戸の硐民に對する關係は決して純粹平等の賣買關係にはなかつたと思われる。これ亦、別稿で詳述されるので、こゝでは、先に引いた石壁廠擴散爐戸が、一爐五十兩程の小さな生産者であつたのに比べて、彼らが鑛石を買った相手―李光華ら夫長群―が、萬餘の資本を擁し、多數の砂丁を雇傭する採掘企業家であり、且つ省當局との政治的結合が極め

て強く、兩者の間に激烈な對立のあつたことを、こゝで指摘しておこう。⁽⁴⁾

最後に、爐戸と冶金労働者—爐丁との關係にふれねばならないが、史料に乏しく、十分にはわからない。たゞ「表一」の小工の賃銀は一日僅かに銀一分五厘であり、「表二」の冶金労働者（延¹³⁶人）の場合も、爐戸の總生産費の僅か0.4%の賃銀を得ているに過ぎない。その上、職制としての頭人達（三章参照）の支配をも考慮に入れると、爐丁は爐戸から苛烈な収取を蒙り、兩者の矛盾は激しかつたと思われる。

かくて、右の如き諸矛盾を内包していたが故に、冶金の基本的生産單位であつた爐戸の在り方は、決して固定しておらず、絶えず變動し、變貌しなければならなかつたのである。章を改めて、「商」を考察しよう。

註

(1) 王明倫氏、前掲論文。

(2) 「桂陽廠銅斤、全賴綠紫坭、石壁下出產」—「成案」卷十五、「白沙・梅田地方添設卡役稽查私販銅鉛」。

(3) 乾隆十八年12月11日、布政使周人驥の詳文によれば、「（石壁下の銅）廠、歷無燒煉鐘座。俱係遠隔十餘里、數十里之江龍源、張家嶺、吉冲頭、藕塘、小溪頭、沖頭源、黃田等處民人、買砂回家煅煉。爐座起停無定。……銅色又低、不堪供鑄」—「成案」兩

卷十四「飭查桂廠白鉛黑鉛及綠紫坭石壁下等處一切偷漏各條」—なお彼らが「家室に就いて」燒銅したことは、「成案」卷十八「爐戸存貯砂石押令趕煉」、及び「計粘抄票一合」及び「冲頭園、藕塘、藕塘三處、別設爐卡燒煉銅斤毋稍透漏滋弊」を参照。

(4) 「成案」卷十三「郴桂礦廠銅鉛有孽獲私銅一百斤乃至一千斤者分別獎賞」、及び前掲「飭查桂廠白鉛黑鉛及綠紫坭石壁下等處一切偷漏各條」

(5) 本章註(3)の諸史料参照。なおこの問題は別稿で詳述する。

(6) 羅慶鄉修彭玉麟等纂、同治十一年至十三年刊本「衡陽縣志」卷七之二列傳79 a

(7) 「綠紫坭爐共五十七座、每爐儘燒可裝砂三十石、前後趕緊兩月、可燒三爐約可出銅近八百斤。是每月每爐約可出銅近四百斤、通廠每月約出銅二萬餘斤」—前註(8)の史料参照。

(8) 王大岳「論銅政利病狀」—「圖略」及び、「皇朝經世文篇」卷五二所收—

(9) 「成案」卷十二「辦理礦廠各條規」

(10) 嚴中平氏の前掲書に詳しいが、別稿も参照。

(11) たとえば、石壁下大有壠の爐戸。—これについても、別稿参照。

(12) 拙稿(1)及び別稿参照。

(13) 嚴中平氏、前掲書。

(14) 光緒16年督辦雲南礦務唐燭の上奏に據つて作製。—王文韶等、光緒27年纂修「續雲南通志稿」卷四十五、礦務、銅價參照。—

(15) 前掲、王大岳「論銅政利病狀」

(16) これまで、山林・樹木の伐採・利用を許されていた佃戸達が、冶金の發達—木炭の商品化につれ、その利用を禁ぜられた爲に

者の間にはげしい争が起つた。——東京大學、東洋文化研究所大
本文庫「演讀偶存」参照。

(7) 乾隆28年頃、私煎の冶鐵業者が高い値で木炭を買い占めたため、
湖南、桂・常の銅爐戸達はその値上りに苦しんだ。——「成案」卷
十七「桂・常銅廠炭勸不許私運他處其炭每石準以二錢爲定母得
高擡價值」

(8) 別稿に詳述。當面、本章註(3)の諸史料参照。

二 「商」(官商・部商・礦商)と「客販」(客商)

「各省の開廠事宜にならつて、本省(廣東省)の殷實商民を
招き、資本を自備せしめて開採させたい」——雍正12年、廣
東省の銅廠開採の公許を雍正帝に奏請したこの兩廣總督鄂
爾達の言葉は、「招商」こそ清代開礦の全國的一般的な規定
であつた事を示している。事實、そうであつた。⁽²⁾ 従つて、
この「商」とは何であり、それが銅・鉛鑛業においていか
なる地位を占めたかを説明する事が、極めて大切な問題で
ある。所で、雲南鑛業に關する重要諸史料(表(三)参照)は、
硃民や頭人集團に關しては、詳細に傳えるにも拘らず、こ
の「商」については全くといつてよい程語っていない。私
の見た限り、僅かに「雍正硃批諭旨」——(以下「硃批」と略稱)
に「總商」⁽³⁾「鑛商」⁽⁴⁾という言葉が見え、康熙末年から雍正に

かけて、夫々大きい役割を果たした事が知られるのみである。
これに反して、湖南省では、硃民や頭人集團に關しては、
雲南省程、詳細にはわからず、「商」や「客販」については、
可成り詳細に何うことが出来る。本章では、湖南の場合を
中心に、「商」及び「客販」を考察してみたい。

「招商開採」と云われるこの「商」とは、一般的な意味で
の「商人」ではなく、特殊な内容を持つ。即ち、「桂陽縣鑛
廠……國朝雍正年間、兩經邑好事者、引誘外人、挾貲充商、
呈准則試」——或いは「歷來礦商、厚挾貲本、招集砂夫、憑憑
富戶、合夥開採。……始爲頭人、繼充礦商」などと云われる
ように、豊かな合夥資本を擁しつゝ「充商」された、つま
り、國家權力から「商」たることを公認された特殊の「商」
——「鑛商」であり、動詞的に、「承商」⁽⁵⁾とも綴られる。亦、
「郴州鉛鑛、向有商人陳開業、報部充商、在廠料理、知州
督辦」⁽⁶⁾とある如く、中央(戶部)の認可を得たものを「部商」⁽⁷⁾
と稱し、亦、「官商」(後出)ともよばれる。

鑛業生産において、國家から、何らか特殊の身分と地位
を公認される以上、何らかの任務を課せられ、同時に亦、
何らかの特權を與えられた事が豫想されよう。事實そうで

あつた。

乾隆16年7月初4日の湖南布政使周人驥、驛鹽道沈偉業の詳文に「砂夫・爐戸買賣礦砂。原驗砂内銀氣有無、鉛氣輕重、以定砂價之多寡。商人亦按砂價之數、抽收稅課」⁽⁹⁾とあり、乾隆17年12月25日の周人驥らの詳文にも「銅鉛錫、砂價稅銀、例應按月按季造報、年底彙造題銷。……從前官商承辦、任意沉擱。即或造報、或朦混不清。將銅鉛稅項、公然侵盜」⁽¹⁰⁾とあり、乾隆18年6月初7日の周人驥の詳文にも「(郴桂)各廠抽收稅課等項、向係商人收管」⁽¹¹⁾とあるように、商人が國家から課せられた重大な役割の第一は、「廠稅」を國家に代つて徴収する事であつた。それ故に「商」は「官商」とも呼ばれたのであろう。こゝに云う「廠稅」とは、採掘業者が、爐戸に各種礦石を賣る際に課せられた銀形態の「砂稅」と、現物形態の「稅銅」「稅鉛」の二つに大別され、黒鉛鑛に銀氣のある場合は「砂稅」は更に一般の砂稅と銀稅との二つが課せられた。因みに、銅・白鉛爐戸は夫々稅銅・稅鉛を負擔し、「商」がそれを徴収したが、黒鉛爐戸の場合は、既述の通り、毛鉛を生産する爐戸と、毛鉛から淨鉛・淨銅を生産する爐戸に分れ、この二つの過程を

「商」及び「客販」が仲介し、夫々の爐戸から夫々の生産物を買ひ取る形を取つたので、黒鉛爐戸は納稅する必要がある。云い換えれば、「商」や「客販」が納稅義務者であつた。⁽¹²⁾「商」は毛鉛・銅・鉛の生産過程にタッチしたときは、自ら稅銅・稅鉛を納入しなければならなかつた外、採掘業者から砂稅、銀稅を、白鉛、銅爐戸から夫々稅鉛、稅銅を、亦「客販」からは稅鉛を、官に代つて徴収する廠稅請負人なのであつた。

第二に、「商」は、國家の要求する現物の銅及び黒・白鉛を官憲に納入する役目を荷つていた。たとえば、毛鉛から淨銅、淨鉛を生産する爐戸から官が収買する銅・鉛の代價は、「商」が知州から受領して爐戸に支拂ひ、その銅・鉛は「商」の手を通じて官憲に納入された。⁽¹³⁾いや、毛鉛からの銅鉛のみならず、郴・桂兩廠とも、官が爐戸から買ひ上げる凡ての銅の代價は、「商」を通じて支拂われ、現物の銅は、「商」の手で官憲に納入され、そのとき、「商」は收銅の詳細を官に報告する義務を負つていたのである。即ち、「商」は廠稅徴収責任者であつたばかりでなく、湖南省の鑄錢局(寶南局)の需要する銅・白鉛・黒鉛及び、省から戸・工兩部に納

入する部鉛（戸・工兩部の鑄錢局―寶泉、寶源兩局―用、及び宮廷顏料用の黑鉛）を、各地の爐戸から買い集めて、省政府に納入する所の、銅・鉛請負人の役割をも擔つていたのである。「商」が「革退」されて、徵稅權を奪われているときにも、なお、現物としての銅・鉛を請負う役割は殘されていた。¹⁰⁵

なお、上述の「商」と「客販」の關係については、今後の研究にまちたいが、兩者が同一でないことは、「一切の商・夫・爐戸・客販・下巡人をして知らしめよ」と地方官が令している事によつて知られる。¹⁰⁶「客販」は、毛鉛↓銅・鉛生産過程にタッチし、¹⁰⁷亦、鉛の請負人であつたことは明瞭であるが、徵稅權は賦與されておらず、官側からみたその地位は全般的に、「商」より下級であつた事は疑いがない。むしろ、鉛の流通面での活動―つまり、定額の鉛を官憲に納入し、反面、餘鉛を國內市場に運んで利益を得る權利を與えられていたところに、「客販」の本領があつたと考えられる。¹⁰⁸

さて、徵稅責任者であり、銅・鉛請負人であつた「商」には、絶大な特權が與えられていた。

先づ、爐戸が、採掘業者から礦石を買う際、「商」は爐戸

から「勾砂銀」、「紅票銀」と名づけられた正稅以外の附加稅を徵收、入手する權利が與えられ、その額は決して少なくなかつた。たとえば、乾隆十一年から十五年に到る五年間に、「商」は郴・桂兩廠の爐戸から總計四千八百五十三兩六錢一分を徵收した。²⁰¹だが商にとつてもつと大きい取り分は、白・黑鉛採掘業者から、自ら徵收する「砂稅」の半分を「商得一項」として公然と與えられていた事である。²⁰²たとえば、柳州鉛廠の部商、陳開業の如き、乾隆二十一年の一年間に、一萬四千餘兩の砂稅の半分、七千餘兩を得て「自銷」したし、²⁰³同じ頃（二十三年）、桂・常の鉛鑛商人も、三千兩を得ている。²⁰⁴年間數千兩に達する彼らの取り分は、桂陽の白鉛爐戸が、一年間にせいぜい四十數兩位の利潤しか擧げ得なかつた事と比較すれば、その大きさが理解されよう。

「……始爲頭人、繼充礦商。廠下公費、官吏周施、其爲不貨。方其盛也、用之泥沙、食必肥甘、衣必文繡……使用多人、故舊親朋、抽豐無數、意氣揚揚」²⁰⁵と傳えられるのも、あながち誇張ではなかつたであらう。

さて、國家權力の代理人的性格と役割を擔つていた彼らには、それに附隨して、當然、別の權限が與えられる。そ

れは、徴税し、亦、銅・鉛を請負うために必要な估砂權——即ち、鑛石の種類、品質を定め、亦、その鑑定に基いて、砂税の額や、各地の爐戸の生産物の多寡と税額を推定する權限——であつた。²⁸⁵ この權限一つでも、砂戸人や爐戸に君臨する威勢を「商」に與えたに違いない。蓋し、先づ、この兩者は、相互に鑛石を賣買し合う關係にある業者であり、「商」の估砂の如何は、砂戸人にとつては、直接砂税の額に、爐戸にとつてはその生産費（鑛石價格）と生産物税とに、夫々大きく響いたからである。たとえば、白鉛爐戸が、規定の二八抽課では「折本し（元手もとれず）、紛紛と停工せねばなりません」と地方官に訴えているように、²⁸⁶ 爐戸にとつて、課税は大きい負擔であつたから、彼らの生産の發展にとつて、估砂權をもつ「商」は大きい影響力と支配力を持つていたのである。のみならず、第二に、官の低價格收買に應ずるだけでは、爐戸達の再生産は絶えず危機に追いこまれていたので（別稿参照）、彼らは、私賣即ち、國內市場との結合を計らねばならなかつたから、估砂權を握つて、爐戸達の生産量を知悉している「商」の動向は、同時に、爐戸達の私賣を左右する點で、一層大きい力を持つていたの

である。更に亦、「商」は銅・鉛請負人たる地位を利用して、地方政府から爐戸達へ支拂うべき銅・鉛の代價を、しばしば着服することによつても、²⁸⁷ 爐戸とその生産に大きい力を發揮したものである。地方官も「爐戸、砂戸人、多屬窮民、工本不能久擱」²⁸⁸と認めざるを得ない程、資本に乏しく、その運轉に苦勞した爐戸達にとつて、「商」達の工本（官からの支拂代價）私銷は、きびしい収奪であり、彼らの再生産過程をしば／＼窮地に追いこんだに違いない。

而も、更にもう一つの重要な點で、「商」及び「客販」は爐戸達とつながつていた。

乾隆16年頃、桂陽州鑛山の「商」に充てられていた夏元音について、驛鹽道沈偉業が「煉銅爐戸は皆資本が乏しい。……商人夏元音も亦、厚賃を所有せず、彼の承辦に係る綠紫坳や石壁下の銅觔の必要に應じて爐戸達へ資本を墊發する（貸しつける）事が出來ず、爐戸達は皆、大いに不便がつている。さきごろ憲臺の定められた招商案内に、商の資本の多寡を調査した上で承充すると明記されている事は喜ばしい」²⁸⁹と述べているのは、一般に「商」が爐戸に資本を貸しつけるのが通例であつたことを示している。亦「爐戸多

有先受客銀、爲砂價（採掘業者に支拂う鑛石の代價）・焼煉工本・飯食之資⁶⁴とあるように、「商」より一段下の「客販」も、鑛戸に資本を貸しつけていたのである。かくて、「商」や「客販」はその公許された権限や地位からだけでなく、豊かな資本力に物を云わせて、精煉過程の基本的要素たる鑛戸に君臨していたと見なければならぬ。

所で、「商」達が、廠税徴収責任者として、亦、政府への銅・鉛・錫斤納入の請負人として、官憲から大きい諸特権を與えられ、且つそれを活用して、砂戸人や鑛戸に君臨していたという事は、だが、彼らが終始、官憲に忠實なその代理人であり續けたという事を意味しない。今述べたように、鑛戸への資本貸付者であつたという事自體、「商」達が、單なる官僚機構への寄生者でなかつた事を暗示している。而も、事實は、資金貸付者である以上に、彼らは生産的であり、企業家的役割を荷つていたのである。彼らが、官商であると同時に、銅・鉛採掘業への合股投資家集團の代表であり、彼ら自身が巨額の投資者であつたことを、こゝで、想起しよう。即ち、彼らは「厚挾資本、招集砂夫、慫慂富戸、合夥開採。……始爲頭人、繼充鑛商」（本稿67頁参照）と云われ

る、その「商」なのであつた。湖南省程、その實態は明らかでないが、康熙末年、督撫布政使と緊密に結び、その特權的地位を利して、雲南全省の銅を一手に操縦した雲南銅鑛業の「總商」王日生も亦、採掘業への投資家であつた。⁶⁵ 湖南の官商の場合は、その企業家性は一層明瞭である。

たとえば、郴州鉛鑛の「商」は、「商人自立熔房、自傭工匠」⁶⁶と明記されるように、「商」自身、生産手段（爐と爐房）を所有し、自己の資本で冶金労働者を雇傭して、黑鉛鑛から、淨鉛と淨銅を生産する冶金企業家だつたのである。同じく「商」でも、桂陽州の場合は、毛鉛鑛戸と淨銅・鉛鑛戸から夫々生産物を買ひあつめたのに比べると、この郴州の「商」の企業家性は一層明瞭になるだろう。因みに「商」のこの企業家性は湖南省にとゞまらなかつたようである。⁶⁷

もちろん、上述した「商」の採掘企業家性冶金企業家性の展開は、「商」制全體の、清朝國家權力との結合、それへの寄生性を、決して否定するものではない。だが、そうした官商乃至特權商人層の中から、右の如き企業家性が展開されていた所に、むしろ、問題の深さがある。即ち、それは、清朝國家權力が、自己の代理人として鑛業生産關係

の中に送りこんだ「商」そのものが、代理人的寄生性と同時に、自ら採掘労働者、冶金労働者を雇い、商品生産を行う企業家性を内包していたという事であり、更に云い換えるならば、特権の官商身分の「商」そのものが、私的企業家として、彼らなりに、清朝國家權力と對決せざるを得ない本來的な歴史性を擔つていたという事である。それは亦、明代に始つた民營鑛業の矛盾と發展を語つてゐる。

註

(1) 鄂彌達「請開鑛採鑛疏」——「皇朝經世文篇」卷五十二戶政、錢幣上。

(2) 拙稿(1)參照。

(3) 「硃批」、貴州威寧總兵官、石禮哈「雍正3年4月22日の條」。

(4) 「硃批」湖北按察使王柔の項に、永綏協副將張鶴が雲南游擊の任にあつたとき、「辦理東川府廠務、礦商所得賣價、每價每銅百斤不過八九兩」とある。なお他省「たとえば廣東省の總商について」は拙稿(1)、鑛商については「硃批」孔毓珣雍正2年12月12日の條、官商については同、楊文乾雍正3年12月20日の條、貴州省の官商については、同鄂爾泰、雍正7年11月7日の條などを參照。

(5) 朱儔等纂、嘉慶重修刊本「直隸郴州總志」卷十九、礦廠。

(6) 「桂東縣試採銅・鉛砂事、乾隆四十七・八兩年、檀樹瀟(地名)」

訛言、白竹・寮口(共に地名)錫苗見、閩邑之人若狂。……桂陽州譚某、張某、長沙周某、各挾重資、來桂東承商。慫恿富戶、合夥開採。知縣潘芝成准其創試……」前掲「直隸郴州總志」卷十九、礦廠。

(7) 乾隆23年6月15日衡永郴桂道孔傳祖の稟文——「成案」卷十六「郴州鉛錫礦廠情形開銷細數各條」

(8) 開鑛には、本來、戶部の許可證(部文)が必要であつたようである。丁士傑が「臣思開採之處、其中有奉部文者、應聽其開採。

……臣思既無部文、又未題明、即係私開……」と上奏したのに對し、雍正帝が「至礦廠一事、即係奉文開採。倘或於地方有不便處、亦當斟酌奏請停開。私窰者何待言耶。……此密論也、母令人知。若仍本地窮民爲資身命起見、不至聚集千百多人、又在爾等留寬一步。法雖一定、權變隨人」と答えた事がそれを物語る。と同時に、「部文」がなくとも、無提の權限によつて、隨時開鑛が許可され始めた事、即ち、合法的開鑛範圍の擴大をも物語つてゐる。——「硃批」、丁士傑、雍正3年5月13日の條——

(9) 「成案」卷十二「辦理礦廠各條規」

(10) 「成案」卷十三「礦廠議辦各條規」

(11) 「成案」卷十三「郴州礦廠銅鉛有擊獲私銅一百斤乃至千斤者分別獎賞」

(12) 「爐戶燒出鉛斤、賣與客販。……礦廠之砂有砂稅。鉛有鉛稅。砂稅則抽之賣砂之砂夫。鉛稅則抽之販鉛之客販。而爐戶買砂燒鉛、兩不干涉。……凡爐戶赴廠所買之砂……入爐燒出鉛鉛、賣與客販、客販皆赴局抽分、然後敢運出境」「令買砂之爐戶・上稅之夫長・客販、并白鉛上稅爐戶、逐日逐項、親填砂數稅數」——前

註(9)の史料参照。―採掘業者、白鉛爐戸、と買鉛の「客販」が納税主體であるのは、此の史料で明らかであろう。「商」が納税主體であつた事は、右の史料では明かでないが、桂廠の戸部商人の一人易經世が、毛鉛↓銅・鉛燒出を支配していたので、その際、「商」が納税主體であつた事は明らかである。―乾隆11年5月初4日布政使徐杞らの詳文―「成案」卷十一「辦理鉛渣煉銅各事宜」を参照―

(13) 乾隆18年12月11日布政使周人驥の詳文―「成案」卷十四「飭查桂廠白鉛黑鉛及綠紫鉛石壁下等處一切偷漏各條」

(14) 「成案」卷十二「辦理礦廠各條規」

(15) 前註(13)の史料参照。

(16) 前掲「成案」―「礦廠議辦各條規」

(17) (18) 本章前註(9)の史料参照。

(20) 「成案」卷十三、「勾砂紅票銀兩解司充公并嚴禁毋許私收」

「礦廠抽解額例。黑白鉛砂、每賣砂價銀一兩、抽稅銀二錢。官收一錢以作正稅。商得一錢以作廠費」謝仲玩等乾隆37年纂直隸郴州總志」卷十二、物產・附礦廠―。「成案」にも、綠紫鉛の圍牆が「遇有傾圮、即照例子商得項下、動支修整」とあつて、―前掲「礦廠議辦各條規」―「商得」なる項目が定則化されていた。

(22) 郴州鉛廠、向有商人陳開業、報部充商。……所收各廠砂稅、向例一半歸官爲正稅。一半歸商、名爲廠費。乾隆二十一年六月内、本道到任督辦起至年底止、核計是年收過稅銀、多至一萬四千餘兩。除歸正稅七千餘兩外、其餘一半盡歸商人自支銷。……―「成案」卷十六「郴州鉛錫礦廠情形開銷細數各條」―なお雍正時代

の部商、王綱明・邱道正らについては、拙稿(1)参照。

(23) 「成案」、同右。

(24) 前掲、嘉慶重修「直隸郴州總志」卷十九礦廠。

(25) (郴・桂) 各廠銅鉛錫斤、砂色等次甚繁。難以預定價值。惟憑商人臨時公估。砂夫不能撻賤爲貴。爐戸亦不能抑貴爲賤。―乾隆18年6月初7日布政使周人驥の詳文。―「成案」卷十三「郴州礦廠銅鉛有擎獲私銅一百斤至一千斤者分別獎賞」―

(26) 前掲「成案」卷十二「辦理礦廠各條規」

(27) 「查規水」(毛鉛から銅・鉛を精煉する)煉銅、約費火工七八次。需用人工柴炭甚多。仍該商將火工食銀二兩二錢八分盡數侵蝕、以致爐戸評告。―乾隆19年間4月初2日布政使湯聘の詳文―「成案」卷十四「桂陽州銅鉛出產地名各條」。一般に官收買の銅價について、「該州每年赴司庫請領回州。陸續交商轉給。……及轉

交商人、該商復那移花費……」―「成案」同右。

(28) 乾隆17年12月28日布政使周人驥らの詳文―「成案」卷十三「鑛廠議辦各條項」

(29) 「成案」卷十二「辦理礦廠各條規」

(30) 乾隆19年間4月初2日布政使湯聘の詳文―「成案」卷十四「桂陽州銅鉛出產地名各條」―

(31) 「前任貴州巡撫帶來一人名王日生者。聞係湖廣荊州府之惡棍也。前撫臣任江蘇布政司時、即以之爲用人。後補授雲南布政司、亦以此人爲總商。通省銅廠所出之銅、皆經其手。所得之利不計其數。王日生與督撫布政司均分。後於康熙五十八年陞授黔省巡撫時、王日生又同至黔省、到威寧府開採天橋等廠。至四川重慶府發賣。所過之處、仗巡撫之勢、俱不納國課。得銀數萬金、與撫

巨平分。……」〔硃批〕、貴州威寧總兵官、石禮哈、雍正3年4月22日の條。

〔本〕本章註の史料参照。

〔例〕たとえば、江西省恭城縣の場合、「各壩商人、資本有餘者、則開爐煉銅。若資本無多者、將砂斤作價轉售。……」〔中國近代手工業史資料〕、第一卷三五六頁参照。この史料は亦、採掘業と冶金業とを一つに統一する巨大な資本と、鑛石を爐戸に賣ることとまる小資本への、商人資本内の上下の分解を示している。

三 頭 人 集 團

冶金過程の基本的單位としての爐戸と、複雑な二面性を持ちつゝ爐戸に君臨する「商」——これらで、當時の鑛業生産の諸要素が語りつくされたわけではない。現に「商」そのものが、決して「商」個人でなく、「慈惠富戸、合夥開採……始爲頭人、繼充礦商」(前出)と云われるように、少くとも、合夥投資家集團及び「頭人」と密接につながつていたのである。先づ、「頭人」なる者は何であり、鑛業生産關係において、いかなる役割を擔つていたか。

當時の採掘業は、ごく少數の鑛山師達によつて、粗末な小屋や當座の少額資本が準備され、且つ、彼らの指導で、探鑛・試掘・試煎が行われた上、その中心人物から開業願

が所轄官廳に提出され、官憲の許可を得てはじめて、開業されるのが、通例であつた。⁽¹⁾そして、右の鑛山師達の試掘、試煎が、成功しそうだと言ふ報が傳わると、採掘業に資本を投じ、利益分配にあづかろうとする者が遠近より「紛來」する。これらが「米分廠客」と名づけられた合夥投資者達であり、彼らの合資によつて、硐口を認定し、硐丁兄弟

(本稿四章参照)

を雇ひ、はじめて採掘業が始められるのである。⁽²⁾

林則徐が雲南銀鑛業について「礦廠向係朋開、其股分多寡不一。……自必見有好鑛、而後合夥」と記しているのも、右の事情を簡潔を傳える。即ち、採掘業投資家達の投資は、その始めから、鑛山師達による生産準備過程と官廳えの手續きを前提としていたのである。そして、開鑛の最初から、生産過程のヘゲモニーをとり、且つ、官憲との交渉を引き受けていた鑛山師達こそ、「頭人」とよばれるものであつた。比較的整備された大きい鑛山ではそれは「七長」と名づけられ、數人の「頭人」集團が、鑛業上の諸種の役割を分擔していた。地域、或いは、生産規模の大小、亦是鑛種の差によつて、名稱や、「頭人」の數は、夫々一樣ではないが、鑛業生産關係において極めて大きい役割を擔つた事では、

大きい差はなかつたようである。「頭人」の役割と、投資者、採掘労働者との關係を示す〔表三〕を作製した。——本稿篇末参照。

さて、この「頭人」集團の評価については、その存在によつて、鐵業生産における資本主義的萌芽を否定する説と、この集團は、清朝の行政管理機構であり、決して生産機構を構成するものではないから、その存在によつて資本主義的萌芽を否定することは出来ないとする王明倫氏の説との二説がある。⁽⁴⁾確かに、彼らに清朝の管理行政機構の側面のあつた事は否定出来ない。

先づ、雲南鐵業の「頭人」集團を最も詳しく傳える「圖略」上、「役第十」を見よう(表三)B・11。「書記」「巡役」「練役」「壯練」とならんで、「課長」から「洞長」に及ぶ七つの長が列擧され、夫々の役割が記されている。これらの長は、林則徐が「雲南五金之廠、皆有廠現。其頭人分七長」と傳える、その「七長」であり、「頭人」である(表三)B・10)。所で、「圖略」はこの頭人集團を、資本家集團の代表としての「鍋頭」や採掘労働者としての「丁」と明確に區別して、「役」として位置づけている。而も、鐵場内

の、明らかな胥吏——「經書」「清書」「課書」などによばれ、銀・銅及び銀課の收支存運を司ると共に、官憲の「諭帖・告示」を承行し、従つて、全く、清朝行政管理機構の末端を構成する所の、その胥吏と同列に位置づけている。

課長以下の七長が胥吏そのものではないことは、胥吏が官署からの派輪を必須條件とされているに較べて、七長は廠内の保舉であつてもよいと規定されていることから伺えよう。而も、そうしたニュアンスの差を内包しながら、やはり、集團全體としては胥吏と同列に置かれ、それと一括して「役」制を構成している所に留意しなければなるまい。

亦、具體的な役割についてみても、胥吏は現物としての銀・銅及び銀課の收支存運を課長は「支發工本」、つまり、當時の爐戸の生産、再生産にとつて決定的な意味をもつた官の生産物収買價の支拂いを司つたのであり、これらの仕事は、前章で述べた所の、湖南省の「商」『官商』の責任事項と全く同様であり、彼ら頭人の一部は、國家權力の代理人として、銅・鉛・銀を官に納入し、且つ、廠税を徴収する任務を擔つていたのであつた。

更に、雲南でも、湖南でも、採掘、冶金の兩過程が分離しており、且つ、この兩部門の業者達は夫々官憲のきびしい収奪に對抗して、脱税と生産物の私賣（國內市場との結合）を計つたし（別稿参照）、亦、採掘、冶金労働者も絶えず反官活動を行つたので（第四章及び別稿）、官側としては、それらの生産諸過程と反抗を不斷に監視し、統轄する必要がある。かくて、頭人集團——とくに、その中の胥吏、課長、巡役などは、その必要のために、官から創り出された組織であつたと云えよう。事實、吾々は、「表三」以外の他の諸史料によつても、官側が生産を高め、或いは鑛業全體を、とくに鑛業労働者を管束せんとする際、しばしば頭人集團を自己の末端機構として活用し、その觸手として働かせたことを確認出来る。道光末、雲南の銀山を復活しようとした林則徐が、官營を排して、民營を主張しつゝ、而も、「所以約束爐戸尖戸及鑛丁砂丁類」としての頭人集團——七長の力を再評價したのは、まさしく、頭人集團の國家權力にとつての、一般的な役割を端的に語っている（本章、前註③）。

他方、國家權力に依存する事によつて、頭人集團は大きい寄生的分前を得ていた。即ち、林則徐によれば、「撒散」

とよばれる「頭人・書役・巡查」の工食・薪水の外、火耗・馬腳・硃主・硃分・水分・西岳廟功德・合廠公費等の名目は、凡て正款以外に、頭人集團が、企業家から取り立てた彼らの私的収入であつた。その大きさは、今確かめ得ないが、たとえば彼らの中の「廠官」とよばれたものが、「先馬執役、居然官矣」という威勢ぶりを發揮したり、亦、彼らの重要な役割からみて、それは決して少額のものではなく、亦、質的にも湖南の「商」が取得した、「勾砂銀」「紅票銀」や「商得一項」と同様鑛業生産を寄生的に阻むものだつたに違いない。⁽⁸⁾かくて、頭人集團は、王氏の論斷したような側面即ち、清朝の行政管理機構的性格を内包していたことは間違いない所であろう。

だが、王氏の主張するように彼らはかゝる性格と役割で貫ぬかれていただろうか。

吾々は先に、採掘業開始前の準備過程において、頭人集團の果たした役割の大きさ及び彼らと合夥投資家集團との結合の重要さを指摘した。この事は、とりもなおさず、頭人集團の、生産過程への深いタッチ、或いは、彼らの濃厚な生産性を示すものであつて、彼らが全く寄生的な行政管理

機構性だけに貫ぬかれていたとは、決して云い切れぬ複雑な性格を帯びていた事を物語るのである。他方、投資者集團の側にとつても、その生産の開始と發展のためには、頭人集團の存在は必然であり、必要でもあつた。蓋し、民營鑛業が次第に發展しつゝあつたとは云え、その經營者乃至企業家が、政權の座にあつたのではなく、時には、ある頭長（頭人の一人）が衰亡に瀕した銀鑛山を苦心慘膽の末、ようやく盛りたてたとき、巨萬の利益の上つた鑛山全體を官僚から掠奪されると云つた事例が示すように、或いは、私營鑛業が、官憲の公許亦は見逃しがなければ、往々武力によつてとりつぶされた數多くの事例が示すように、鑛業企業家は絶えず清朝國家權力のあらわな脅威にさらされていたのである。むしろ、鑛業資本家や經營者が、勝利した「市民權」をもたず、逆に、封建的權力から不斷に脅かされ、収奪されつゝ、發展して行くところに、まさしく清代鑛業の歴史的な在り方があるのだろう。それ故、開業、投資のはじめに、官憲との接衝に當つた頭人達とその活動が、投資家集團とその生産活動にとつていかに大きい役割を果したかということも、亦、理解されるであらう。ともあれ、

頭人集團と投資家集團との結合の必然性は、頭人集團が、單純に、行政管理機構として、鑛業生産外に在るのではなく、その面を含みつゝ、同時に、鑛業生産機構内の上層部的要素として存在したことを示すものと思う。

その事を、一層明らかに語る問題が、別にある。即ち、頭人集團の中、鑛業生産にかゝわりの深い頭人達は、極めて重要な生産的役割を果したと考えられるのである。〔表三〕についてその事を考えよう。

「鑛頭」(B, 2:3:6:8)「廂頭」(B, 5)は夫々名稱は異なるが、共に坑内の支え木の設置と按排とを指導する現場監督的頭人であり、直接、採掘過程にかゝわる重要な役割を果したが、特に、B, 11の「總鑛」「硐長」は、樞引(外部にあらわ)、荒色(土質のこと)、硃道(坑道のことか)及び鑛質を熟悉し、亦、或る坑硐を開くべきか否かを決定するという、極めて重要且つ専門的技術を備えねばつとまらぬ役目を擔つていた。冶金部門の「鑛頭」も同様であつたと思われる。さて、坑内に火事や、或いは「蓋被」と呼ばれた鑛坑の崩壊が瀕發し、亦、爐の爆發も少くなかつた當時、否一般に、採鑛から精煉に至るまでのもの／＼の生産技術が高くなり、その成否

は「人事居其半、天事亦居其半^山」と嘆かれた時代だつただけに、熟練技術の所有者は生産上で重大な役割を擔つたに違いない。たとえば、四川冕寧縣の銅鉛鑛山で、「能將不分汁之鑛、善用五行配煉、單出銀星、燒獲銅鉛者」は、とくに「高手匠人」として、珍重されており、亦、「辨鑛・分汁、雲南人爲第一、湖南、貴州次之、西番夷人又次之」^四とも稱されているのは、専門技術の地域的分業化と熟練技術者への強い要求とを語っている。そして、直接生産過程に鋭くタッチした上述の頭人達は、まさしくもなく、熟練技術者達だつたのであり、當然、單なる行政機構の末端者ではない。こうみて來ると、確かに頭人集團は、官憲から鑛業内に派遣された代理人、徴税人であるという強い側面をはらみつゝ、同時に、合夥投資者集團と最初から結合しつつ、鑛山企業内の幹部的技術者集團でもあつたという側面を備えていたと解さねばなるまい。

この事は亦、次の如き彼らの地位と役割によつても確認出來よう。即ち、彼らは、先述の寄生的性格に由來する私的収入の外に、經營収益の何割かを、一定の比率で取得している(備考欄2・3・4)。これは、彼らが單なる鑛業外

の行政管理者ではなく、まさしく鑛業内の上層部に位置していたことの反映なのである。亦、彼らは、單なる技術上の幹部だつただけでなく、直接坑内に向いて、採掘労働者の労働過程を監視、鞭撻するという、職制的役割をも擔つていた(本稿第四^{四章})。かくて、頭人集團全體としては、官側の觸手であるという側面と、私營鑛山の幹部であり、從つて、投資者集團と共に經營利潤を追究しなければならぬという側面との、二面性を内在的矛盾として内包していたと斷定せざるを得ない。それは「商」の内包した矛盾と同質のものと考えられる。ともあれ、頭人を生産過程から全く分離して捉えた王氏の考えは一面的であるだろう。この事を確認した上で、更に「表三」にもどり、そのB欄とC欄とを比較検討してみよう。

構造論的ではあるが、一つの注目すべき問題が引き出せる。即ち、おそくとも、「圖略」が出版された道光二十四・五年頃、雲南の銅・鉛・銀鑛業において、本來「頭人」の受けもつべき役割の一部、而も重要な一部が、「丁」『雇力』即ち、被雇傭者層の手に移されようとしていたことである。即ち、C欄11の、「鑛頭」「領班」の役割は、B欄11

の「總鑛―總工」「硐長」とはゞ等しい。亦、6・10などでは、他の諸頭人と同列に、B欄に配置されている爐頭が、11のB欄では、爐頭が缺けており、かえつてC欄につきまり「丁」―「雇力」の項に排列され、且つ、その技術的役割の重要性が、採掘部門での鑛頭とともに、「硐之要在鑛頭、爐之要在爐頭」ときわだつて高く評價されるのである。この事は、本來的に「頭人」の一手に握らるべき「硐之要」「爐之要」が、熟練労働者の手に移りつゝあつたこと、云い換えれば、「頭人集團」そのものの、特に、直接生産過程につながるその部分の「雇力」への下降的分解を意味しないであらうか。この重要な分解が、いつ頃から始つたかは明かにし得ないが、雍正7年9月19日、鄂爾泰が、貴州省未開の夷地に銅鑛を開き、制錢を鼓鑄・流通させたいと上奏した中で、「令本處保正頭目并雇募爐頭・廂頭、督率教導、許伊等（夷民）各開各地銅鑛」（B・i）と述べているので、雍正年代には、彼らの雇募化が進んでいたに違いない。勿論、雍正以後も、多くの史料では、爐頭は頭人集團の一部として位置づけられており（表B 6・9・10・12）、亦乾隆時代の湖南でも、たとえば白鉛の爐頭は、明らかに爐戸の被雇傭者とし

てあらわれていると同時に、採掘部門の頭人―「夫長」と共に、官憲による擴散爐戸の管束に働いているのをみれば、爐の要を握る爐頭の雇力化は漸次であり、且つ爐頭自身、國家權力の行政管理者的性格と被雇傭者の性格とを、なお同時に兼ね備えていたと考えられる。それにしても―否、その故にこそ、彼らの被雇傭化―下降的分解が始まつたということは疑いの入れぬ所である。

而も、吾々は、彼らの下降的分解とは正反對の、即ち、頭人集團内の上昇的分解をも確認出来るのである。

林則徐は云う。「礦廠向係朋開。其股分多寡不一。有領頭兼股者。亦有搭股分尖者……」²⁴と。即ち、頭（人）であつて（兼股（股分の投資者を兼ねた）者）も有つたのである。署雲貴總督岑毓英も言う。「滇省各屬地方、原共有鑛廠三十八處。向由官處預支工本。又有股實爐戸頭人籌墊炭薪油米、廣招丁役、處處開採。百餘年來廠多興旺」²⁵と。股實の爐戸や頭人が、自ら資本を投じて、丁役を廣招し、採掘業を経営したのである。湖南の場合もそうであつた。乾隆十八年頃、桂陽州石壁下の七脚湖銅山を頭人たる夫長夏圖山等が「領本（官から資本）²⁶」採挖」²⁶したし、乾隆十九年には綠紫峒下の

大湖鑛山、獅子尾鑛山を夫々夫長曹明旺、夫長宋顯智が、「出本雇夫」、即ち、自ら資本を出し、砂丁を傭つて開採した。⁽⁴⁾同じ頃、出水多く、すでに封禁されていた石壁下の停砂壩を再び開採したいと夫長廖小魯らが、積極的に官に願ひ出ている。⁽⁵⁾これらはいづれも、桂陽州の主要銅鑛山、綠紫矸や石壁の子廠であつたが、夫長李光華、徐步瀛、楊如錦、李錦文らの如きは、乾隆廿七年以來、計萬餘の資本を投じて石壁下の大有壩を開採し、漸く五年目に毎日礪石百石の出货量を見るまでにこぎつけ、更に、近くの坑場の通風作業を行うため、毎日十餘兩の資本を投じている。⁽⁶⁾頭人集團は、單なる行政管理機構でないばかりか、明らかに投資家集團への上昇をたどつていたのである。否、「歷來礦商、厚挾資本、招集砂夫、懲懲富戶、合夥開採……始爲頭人、繼充礦商」(先出)と云われるように、頭人から合夥投資集團の最上層者たる「礦商」にまでのし上りさえしたのである。

かくて、吾々は、頭人集團が、全體として、清朝國家權力と結びつき、その鑛業内の末端支配機構としてのものもろの役割を擔いつつ、他方、單なる鑛業外の行政機構であ

るには、餘りにも深く生産關係に入りこみ、投資者集團と固く結合しながら、その私的經營内の幹部的技術家集團を形成し、併せて、採掘・冶金労働者への職制とも云うべき役割を果たしたこと、亦、その地位の故に、經營上の収益の何割かを取得し、而も、漸次に下降と上昇の兩對極に分解しつゝあつたことを認めねばならないのである。鑛業内における清朝國家權力の代理人、徵税人とも云うべき頭人集團が、決して固定し安定してゐるのではなくて、不斷に分解し、動搖してゐたと云つてもいい。勿論鑛業生産關係において、頭人集團が分解しつゝあつたという事は、彼らが、國家權力への寄生性を一擲した事を決して意味しない。だが、右に述べた如き彼らの分解と動搖が明らかに始まり、引き續いて起つてゐた事はやはり、この期の鑛業の發展を考へる上で重要である。

註

(1) 倪銳「復當事論廠務書」[「皇朝經世文篇」卷五十二、戶政・錢幣上—及び王崧「鑛廠採煉篇」]「圖略」所収—及び、乾隆31年雲貴總督楊應琚の上奏「皇朝文獻通考」卷十七、錢法五所収—など参照。

(2) 倪銳、同右の史料。なお、拙稿(1)参照。

(3)「林文忠公政書」丙集、雲貴奏稿「查勘礦廠情形試行開採摺」
(4)王明倫氏、前掲論文。

(5)たとえば、乾隆51年、甘肅省敦煌縣の金砂採取に當つて、人夫50名を一班に組織し、各人に腰牌を帯びさせて、その管束を計つたとき、夫頭を監督として任命、課金を徴収させた(嘉慶會典事例)卷一九三、戸部雜賦、金銀鑛課。清代の支配階級は、鑛業労働者の統轄になやみ、絶えず、保甲法にくみこもうと努力した(雍正6年王士俊の上奏、同12年鄂彌達の上奏——皇朝經世文篇)卷五二所収)、乾隆22年保甲法を更定したとき、鑛廠廠戸には、廠員(鑛場監督官。多くは同知、通判などの佐雜官)を總責任者とし、廠商(前節の官商である)及び課長、峒長、爐頭等の頭人をして、廠内各層人員の編查を行わしめた(皇朝文獻通考)卷十九、戸口考一)。乾隆16年、湖南の錫廠を官辦に改めたとき、砂夫に出入許可證たる腰牌を帯びさせ、腰牌無き者の入廠を禁じたとき、砂夫20名毎に頭人1名を任名、砂夫の取り締りを行わせた。(湖南通志)卷五八、食貨四、鑛廠)

(6)林則徐、先引奏稿。

(7)倪銳、「復當事論廠務書」

(8)林則徐は、頭人による「撒散」以下の私収を「無益の規銀」と稱して銀鑛業發展のために「痛刪」せよと主張している。(先引、奏稿)

(9)武定州の銀鑛山獅子尾廠は、明代(詳細な年代は不明)鳳氏の私有であつたが、官辦となり、宦官が管理していた。その後、明末に、張某が水を排泄するなど經營の維持と發展につとめたが、「廠事漸零落」という事態に立ち到つた。ある年末、他の洞長が

皆歸宅したあとひとり朱某なる洞長が、最も生計逼迫し、家にも歸れず洞内に居住して經營にこれつとめた。翌年正月、突然洞丁が鑛脈をさぐりあて、一舉に巨萬の銀を獲た。それを知つた官僚が銀廠を奪おうとしたので、朱某は獲た銀を持つて逃亡したという。——郭懷禮等纂光緒9年刊本、「武定州志」卷二、物產。

(10)雍正硃批諭旨に貴重な事例が多いが、枚數の關係上、例示しない。民營を主張した林則徐でさえ、雲南の私營銀鑛業を、軍隊を派遣して、とりつぶし、官憲の勢力を導入している。——先引、奏稿参照。——

(11)「鑛藏於内、苗見於外、是曰樞引」——「圖略」引第一——

(12)「土謂之壙、忌音同吐也」——「圖略」語忌第十四——

(13)「石謂之硖、忌音同失也」——同右——

(14)前掲「桂陽直隸州志」卷二十貨殖

(15)「圖略」患第十三

(16)「圖略」鑛第五

(17)林則徐、先引奏稿

(18)咸豐「晏寧縣志」卷五、建置、廠務

(19)本稿 六二—六三頁「表一」

(20)「石壁廠……爐座星散、起停無定、萬難親守試煉。但嚴飾各處爐頭、分查各散爐戸……不許絲毫短少……」——「成案」卷十四「桂陽鑛廠石壁下銅砂煉鑛斤兩確核齊冊查考」

(21)「表一」aによれば爐頭の賃銀が雇主たる爐戸自身の収入よりも多く計算されているのも、爐頭のかゝる二面性の反映であろう。

(22)林則徐、先引奏稿

②岑毓英等纂、光緒20年刊本「雲南通志」卷七四、食貨志八之二、
礦廠二、銅廠上。

③乾隆18年12月11日、布政使周人驥の詳文「成案」卷十四「飭查
桂廠白鉛黑鉛綠紫鉛石壁下等處一切偷漏各條」

④乾隆19年間4月初2日、布政使湯聘の詳文「成案」卷十四

「桂陽州銅鉛出產地各條」

⑤「成案」卷十八「爐戶存貯砂石押令趕煉」及び「計粘抄稟一合」

四 投資家集團と採掘労働者

では、頭人集團と結合した採掘資本家は、どのように採掘労働者を収奪したのだろうか。兩者の相互關係はどうであつたろうか。

採掘業に投資し、労働者を雇傭して得た鑛石を、爐戸に賣る鑛業資本家は、雲南では一般に、硃民・磽戸・尖戸・鍋頭・管事などと呼ばれ、湖南では、砂戸人と呼ばれた。それに對して、各層採掘労働者（雇力丁）は、「弟兄」⁽³⁾と總稱され、亦、峒丁・砂丁・砂夫等の呼稱を持つてゐる。以下、本稿では、特別の必要のない限り、採掘資本家を「鍋頭」、労働者を「弟兄」と夫々總稱しよう。當時の採掘資本家は、合夥分股的な投資者集團として存在するのが通例

であつたから、「鍋頭」はそれら投資者を代表し、その最高の責任者として、企業經營の實務に當つていたのであろう。

さて、勞資關係の在り方を特徴づける第一の問題は、生産諸手段が誰に、亦、どのように所有されたかという事であるが、先づ、當時の採掘要具―槌・尖・鑿・麻袋（鑛石運袋）・風櫃（亦是風箱。坑内通風要具）・亮子（坑内照）・龍（坑内排水要具）等―は、「鍋頭」の所有であつたか、「弟兄」の所有であつたか、不十分な一例を除いて、明確に示す史料を知らない。たゞ、「弟兄」は凡て、無業・無田の貧民であり、龍や風櫃の如き、比較的高價な要具はもちろん、尖・槌の如き小さな要具も、弟兄が所有してゐたと考えるより鍋頭の所有物であつたと推定する方がより合理的であらう。採掘業とそれに伴う冶金業が發展すると僻地がたちまち鑛業都市となり、⁽³⁾廠民の日常必需品と共に、「攻採・煎煉之器具」も商民によつて賣られたので、⁽⁴⁾恐らく、鍋頭によつて購入され、弟兄に配置されたと思われる。

次に、鑛區採掘場そのものについては、占有權は勿論、私有權も亦、少くとも確立しつゝあつたし、富者が一山を山主から買ひとる事も行われた所からみて、⁽⁵⁾「鍋頭」が鑛區

|| 採掘場を所有（事實上の所有を含めて）していたことは、
 ほぼ間違いない所であらう。

次に生産に必要な諸物資―弟兄に給付する米や坑内照明
 用の油などは勿論、鍋頭の所有であつた。むしろ、「大抵
 出資購備油米者爲鍋頭」⁽⁶⁴⁾とわざ／＼註記される程、油・米
 の所有こそ、「鍋頭」をして「鍋頭」たらしめる重要條件だ
 つたのである。當時の採掘場は僻地にあるのが通例であり、
 亦、爐戸の備つた冶金労働者に較べて弟兄の數は多く、と
 くに企業が成功し、一般商人を含む廠民全體の數が増加す
 るにつれ、米の需要量が激増し、米價の騰貴も著しく、ま
 すます米の所有が、鍋頭の在り方を規制する要件となる。⁽⁶⁵⁾
 資本家の別名が「米分廠客」⁽⁶⁶⁾であり、その投資そのものが
 「石分」⁽⁶⁷⁾と呼ばれるのも、資本としての「米」がいかに重要
 であつたかを物語つてゐる。たゞ、「圖略」がその「石分」
 を「數人夥辦一硯、股分亦有大小、廠所首需油米。故計石
 而折銀」⁽⁶⁸⁾と説明しているように、元來現物の米として投ぜ
 られてゐた資本が、銀に折して投資されて來たことは、大
 いに注意される必要がある。

さて、次は重要な雇傭形態であるが、弟兄は、二つに大

別される。一つは「親身弟兄」であり、他の一つは、月給
 （日給）形態の「月活」「草皮活」「雇工」である（以下これら
 を月活形態と總稱する）。

「親身弟兄」の特徴の第一は、月錢を受けないこと、即ち
 「至於砂丁、即係弟兄。其初出力攻採、不受月錢。至得鑛時、
 與硯主四六分財者、名爲親身弟兄」⁽⁶⁹⁾と云われるように、礦
 石を得るまでは、たゞ食糧を給されるだけで、賃銀は支拂
 われないことである。そして、伙房に合宿しつゝ労働に従
 事してゐたと思われる。⁽⁷⁰⁾而も、得鑛の後も個々の弟兄が、
 個々に日給乃至月給を支給されるのでなく、親身弟兄全體
 として、全收益の六／＼四割を分配されるのであり、鍋頭や頭
 人の取り分との比率は固定させられてゐる。（本章註⑦及び
 〔表三〕備考欄2・3・4・7）、而も第二に、「硯民之中、大抵出資
 購備油米者爲鍋頭、出力採鑛分賣者、爲弟兄」⁽⁷¹⁾とあるよう
 に、彼らは採掘した礦石を鍋頭に分賣するといふ奇妙な關
 係にあつたのである。湖南の砂戸人と砂夫の間にも、かゝ
 る礦石賣買形態が存在したので、兩者のかゝる關係は、當
 時、全國的にかなり普遍的な形態であつたものと推測され
 る。この礦石賣買關係と、先述した彼らの受給形態―即ち、

得鑽後の比例配分的な一括支拂形態——との關係はどうであろうか。理解に苦しむ所だが、大體次の様に考えたい。鍋頭が雇傭する雇力——丁の中の一つに、「櫃書」「監班書記」がある(表三C・11)。彼は「獲鑽後はじめて雇われる」のであり、「毎日某某買礦若干、其價若干、登記賬簿、開呈報單」するのが役目であつた。即ち、親身弟兄への賃銀支拂と時を同じうして雇われる彼は、某某(一人一人)の弟兄から買う礦石の價格を計算して、「賑簿」(賑は給。賑簿は賃銀給與簿であろう)に記入、「鍋頭」に報告したのである。こうして親身弟兄個人個人の採掘量とその價格が明らかにされ、これに基いて、親身弟兄全體に對して比例的に配分される給與全額の中から、個々の弟兄の取り分が比例的に決定されたのではなからうか。この櫃書があつて、はじめて、親身弟兄全體への一括的比例配分給與總額から、弟兄個人個人への支拂額が決定されたと考えたい。

「親身弟兄」の第三の特徴は、その移轉の不自由性と彼らに對する「鍋頭」のあらわな暴力的支配である。雲南諸鑛山の勞働者雇傭形態に關して、省の上層官僚が廠員——廠地駐在の佐貳官——に質問を發した事がある。それに對して、

香樹廠の廠員(南安州碑嘉州判趙煜宗)は、「親身弟兄」形態と他の月活形態とを比較し、前者の特徴が「獲鑽後はじめて賃銀を貰う」のに對し、後者の特徴が「獲鑽の有無に拘らず賃銀の支拂を受ける」事と「去留從其自便」事にあると答えた。そこから吾々は、「鍋頭」の雇傭に對して、本人の自由意志に任せられていた月活形態に比べて、親身弟兄形態の勞働者は、去留が自便でなかつたこと、即ち、鍋頭支配からの離脱が不自由であつた事を汲み取らざるを得ない。而も彼らは、鍋頭の權力によつて、籐製の紐で手足を梁棟に縛りつけられ、荆製の笞で鞭打たれたのである。

(表三C、6・9)

讀書人が「其法嚴、其體肅」と語つてゐるこのあらわな暴力的支配と先述の様々な特徴とは、この形態が單純に近代的な雇傭形態ではない事を示している。

彼らは「伙房」(寄宿舎)に集團的に居住し、食糧の現物給付を受け、獲鑽後にはじめて比例配分的な賃銀を支拂われつゝ、鍋頭の笞打ち的な重壓の中で、離脱の自由を持たない。それは親身とか弟兄とか、擬制家族的な呼び名を持つにも拘らず、事實は逆に、多分に封建的落後的な勞働形

態を表現していると云わねばならない。そして、かゝる収取形態は、鍋頭を頂點にした投資家集團に、大きい収益を保證したに違いない。獲礦までは食糧の給付だけであり、獲礦後も、少數の鍋頭や頭人の取り分に比べて、多勢の彼ら全體の取り分は高くはない(表三)備考欄2・3・4)。第一、彼ら全體に約束されただけの比率で支拂われたかどうか、亦、個人の取り分の決定に當つて、横書が正しく公平に礦石を値ぶみしたかどうか、鍋頭や頭人の管打ち的支配を考慮に入れると、極めて疑わしい所である。その上、吾々は彼らへの職制的支配をも確認出来るのであり、亦、鑛業全體に對する國家權力の収奪の強さをも併せ考える必要がある。

鍋頭達が、重税その他の官憲の壓迫を親身弟兄に轉嫁したであらうことは、今、直接的な史料を持たないが、十分、推察に價する事であらう。

かくて、吾々は、その落後的な、亦、きびしい収取關係に位置した親身弟兄形態を、たゞちに近代的な賃労働と批定する事に躊躇する。では、「鍋頭」の鑛業労働者に對する収取關係は、かゝる落後性に貫ぬかれており、そこに近代

的な發展は全然見られなかつたであらうか。決してそうではない。吾々が今考察した親身弟兄形態の中にさえ、新しい芽がひそんでいる。確かに彼等は、國家權力―「商」乃至「鍋頭」―頭人集團―職制的上層勞務者という上下のきびしい収取關係の中で、移轉の不自由を強制され、鞭打たれ、飯場的な生活を續けねばならなかつたが、その彼らの勞働力も、結局、賃銀で買われていたのである。親身弟兄形態のみに眼を注げば、確かに前期的落後性に深く蔽われているように見えるが、これを歴史的に、たとえば前代の官廠に對應する囚人勞働、軍人勞働、そして「派取民夫」(雲初總督奏疏)的勞働形態と比較検討してみれば、落後的な深い装いのの中にひそむ賃労働の芽の新らしさが確認されよう。而も吾々はこの親身弟兄形態と相並んで一層明確に新らしい勞働形態、収取關係の析出を見るのである。

先に少し觸れた、月活形態がそれである。即ち、弟兄労働者と相並んで、當時、「月活」と呼ばれた坑内常雇い工、「草皮活」と名づけられた坑外常時工、及び「雇工」とよばれた坑内臨時工が雇傭され、彼らは弟兄労働者と違つて、獲礦の有無に拘らず、「月給」を受領する労働者であり、而

も、直接鑛場に駐在した地方官―廠員―も、彼らが「去留從其自便」、即ち雇主たる鍋頭の許から自由に去り、或いは自由に雇われるという點で、弟兄勞働者と異つてゐる事を認めねばならぬ程、新しい内容を内包してゐたのである。⁶⁴ たとえ、彼らも亦、鍋頭から鞭打ちの強制を受けたにしても、⁶⁵ 基本的には、自己の勞働力を商品として賣るか賣らないかの自由を獲得してゐた事は重要である。而も、かかる勞働者を産み出す必然的な分解が、清代社會において大きく始つていたのである。

湖南桂陽州の諸鑛山には、一般砂丁の外に、採掘業者から、全然報酬を貰わず働く一群の人々がいた。砂丁が新壠を掘り始め、好砂がまだ獲られぬとき、下砂を坑外に搬出しなければならぬが、砂丁に代つて背負い出し、代償に、その廢物にも似た砂石を貰つて水で洗い、誠に安いが、多少商品價值のある鑛石をよりわけて爐戸に賣る――そういう貧民群である。又、彼らは、高い商品價值のある鑛石が掘りつくされた舊壠からも右の如き下砂を入手し、或いは數人一組になつて、手掘りの形で七・八尺から一・二丈の穴を掘るなどして、同様の劣惡鑛石（以上三種の下砂を一括して「放行砂」と云つた）

を得て、生活を支えていた。⁶⁶ これらの貧民を、驛塩道沈傳業は、「本道在州、或赴山場、或巡歷山之前後左右、見老幼窮民、沿山拾取、沿溝淘洗、及山背挑挖者、每日不下七八百人」と傳えている。⁶⁷ 亦、早く雍正七―八年の頃、署理廣東潮州總兵官李萬倉は、湖南の桂東・桂陽における試採の報が傳わると、廣原惠州府から「蜂聚蟻行、接踵」して湖南に赴き、開鑛を待つ間、典衣（着物を質入れして）餬口、或いは「偷竊」して日を送らざるを得なかつた二・三千人の窮民を描いている。⁶⁸ 彼らは、鑛業内に吸収されない、ルンプロ分子であるというみ方も成り立つかもしれない。だが、桂陽の「放行砂」にむらがる窮民を目撃した道員は、彼なりに、貧民群輩出の原因を考えざるを得ず、「郊關四面二・三十里内、比戸衆多、田疇殊少、窮民紛紛創取……」と捉えている。田疇が人口に比して相對的に少いから、という捉え方そのものには勿論大いに問題はあるが、當時、多量の貧民層が、田疇―農業から分離・析出されざるを得なかつた清代社會の矛盾の激化は、道員の眼を以てしても蔽い難い程顯著になつてゐたという事が大切である。そして農業―農村から析出された無田・無産の貧民達は、大人

しく典衣糊口する域を越え、自己の勞働力を賣つて生きるための職場を必死に求めていた。現に「典衣糊口」する貧民群を語つた同じ李萬倉は、別の上奏文の中で、彼らが廣東省の投資家としての「豪強」と結合して、私掘を行い、官憲の武力彈壓には「羅列鎗械（武器をならべたて）」した事實を述べつゝ、「雖有勁旅雄師、無可施展之地」と嘆ぜるを得なかつたのである。白壽彝氏が評價したいわゆる鑛徒問題がこれであり（前掲同氏論文）、「硃批」の多くの史料は、清代社會の矛盾がいかに激化していたかを傳えている。亦、皇帝や多くの官僚達は、これら鑛徒を「易聚難散」き不逞の輩とみなし、強硬な手段で鎮壓しようとしたが、この矛盾の激化を抑え切る事は不可能であつた。當時、鑛徒を彈壓し、鑛山を閉鎖する官僚達の口實の中心は、鑛業そのものが農業生産とそれに基づく社會秩序とを亂すということであつたが、たとえば前引「桂陽直隸州志」の編者の如きは、かゝる農本主義で、鑛業を禁止する官吏は、「時變を知らざる」ものだと、右の舊い通念に反論を加えざるを得なくされている。鑛業生産に深い關心をもつていた「圖略」の著者の如きは、端的にこう斷言せざるを得ない。

「打廠之人、名曰砂丁。凡廠衰旺、視丁衆寡。來如潮湧、去如星散。機之將旺、麾之不去。勢之將衰、招之不來。故廠不慮礦乏。但恐丁散」と。鑛業にとつて、恐ろしいのは礦石が乏しい事ではなくて、砂丁がいなくなる事だ。勞働者は鑛業が旺勢であれば、いくら無理強いに追おうとしても去らず、衰微すれば、招いても來ない——この正しい把握の裏に、かゝる正しい合法的な捉え方を産み出す現實の進展過程のあつた事を認めねばならない。即ち、「來ること潮の湧く如く、去ること星の散ずる如し」——まさしく、勞働力を賣らんが爲に、自由に去來する新しい賃銀勞働者の析出とその大きい力こそ、右の現實の進展過程であつた。そして、そこに、新しい月活形態の誕生を見る事は誤りであらうか。

吾々は親身弟兄形態と月活形態との兩者の中、いづれが支配的であつたかを確認する事は出來ない。（表三）の諸史料の殆んどが、賃銀の一括比例配分的な弟兄、従つて親身弟兄について語つてゐること、亦、「圖略」が、出產盛んな廠を除いて、一般的には、季節勞働的であると傳えていること、などから推して、なお比較的に落後的な親身弟兄制の

方が量的に多かつたことが推測される。亦、上述の如く雲南省上層官僚が、この兩者の混在について疑念を抱き、わざ／＼部下に質問を發しているのは、月活形態がまだ支配的でなく、産れてから長い期間を經ていない事を想わせる。だが同じこの事は、新しい月活制が、廠地から遠い上層官僚でさえ注目せざるを得ない程、明確な存在を示し始めた事をも意味する。そして、湯丹銅廠などの東川府諸鑛山程大廠でないにしろ、香樹皮銅廠の採掘労働者が、凡て月活形態だと報告されている事はます／＼右の發展の過程を明證しよう。

親身弟兄制が、鍋頭の恣意的な支配の綱に労働者をしはりつけ、十分にしばれる労働形態であるにも拘らず、獲鑛の有無に係わらず賃銀を支拂い、去留の便を許さねばならぬ月活制を鍋頭達が採用し始めたという事は、まことに注目に價する。即ち、新らしい月活による収取の方が、舊い親身弟兄よりも、有利である程、私的鑛業が發展して來た事を示すからである。早く、康熙21年(1682)——吳三桂の亂の平定直後、雲貴總督蔡毓榮が、「派取民夫」的な官廠の害を論じ、「有力之家或富商大賈」の資本による「民營」を上

奏したのも、そして、事實、「富商」から「廢舉の士」「舉貢・生・監」「巨族・紳衿」に到るまで、鑛利を求めて狂奔した(拙稿①)のも、亦、「商」や「頭人」が企業性を帯び得たのも、如上の清代社會の分解、賃労働の析出を基礎としていたと考えられる。ともあれ、「富者出資本以圖利、貧者頼傭工以度日」という収取關係は、明代以來の南丹土州の鑛業を直視した廣西提督田峻の眼にも鮮かに映り出したのである。

而も右の詞に引きつゞいて彼は上奏する。「不敢擾民滋事、是以旋驅旋聚、無所底止」と。富者の出資と貧者の傭工とによる鑛業生産は、反動的支配階級の觀念に反して、決して「擾民滋事」しないし、いくら、兩者の結合をたちきうとしても、到底斷ち切れるものではない。——新しい収取關係の成立はも早や明らかであろう。それ故に亦、吾々は舊來の官廠には見られなかつた新らしい企業家の形成を見るのである。王崧は雲南銀山の或る「管事」(＝鍋頭)の企業經營の苦心と成功の喜びをこう描き出している。

資本を投じて、採掘に苦心を重ねたが、容易に成功しない。も早や資本が缺乏し、労働者もちりちりになろうとし

ている。「徘徊終日、寢不成寐。念及明日天曉索負者、支米油鹽柴者、紛沓而至、何以禦之。無可如何、計惟有一死而已」――まさしく、私營企業の將來を案じ、何とかして、

苦境を切りぬけ、大儲をしたいという、資本家の深刻な悩みである。だが、突然、夜半に鑛頭が部屋に飛びこんで来て、良質鑛をさぐりあてた事を報告すると大變なさわぎがはじまる。死ぬ以外に方法なしと苦しんだその翌朝、「門外馬喧人鬧。廠主（駐廠の官員）及在廠諸長（頭人達）、咸臨門稱賀。俄頃、服食什器、錦繡羅綺。……各肆主者、贈送絡繹。……駿馬嘶鳴於厩、效慰勸譽福澤者、延攬不暇。當此之時、其爲榮也、雖華袞有所不及。其爲樂也、雖登仙者不如」――そして、かゝる状況は、湖南でも同様であつた。

だが、吾々は苦心經營の末成功する鍋頭達の輩出を、決してバラ色一色に描き出す譯にはいかない。

先づ、彼らの成功と致富を傳える同じ筆者が、それに引き續いて、當時の鍋頭の經營が極めて不安定であり、致富した彼等が、しばしば破産に追いこまれざるを得なかつた事を語るのである。――「始而困瘁、繼而敷腴。久之復困瘁。乃至逋負流離、死於溝壑」と。かくて、「廠之廢興靡常、

「朝則滿、夕則虛」というのが普遍的現象であつたし（前註④）、雲南の銅鑛業や湖南の諸鑛業でも同様であつた。それは、全般的な鑛業生産力の低さという基本的な問題とながつているだろうし、そこにいわゆる萌芽期の歴史的特徴があつたと考えられる。亦、「硯民皆五方無業之人、領本到手（官から資本を借りること）、往々私費、無力開採。亦有開硯無成、虛費工本。更或採銅既有而偷賣私銷、貧乏逃亡、懸項累累。名曰廠缺」と、早く雍正3年、雲南總督楊名時が上奏しているような（先出、王大岳「論銅政利病狀」、但し雍正3年の時期は嚴中平氏前掲書三六頁）、鍋頭――合夥投資集團の一般的な資本力の弱さにも基づく。雲南銀山の投資家達が、鑛山師の詐偽――好鑛を見本に見せかけて出資させ、その金を持ち逃げするといふ單純な詐偽にしばしばひつかまつたのも（林則徐先引奏稿）、鍋頭企業の不安定性を物語っているが、鍋頭達の上述の歴史的な弱さは亦彼らが、多かれ少なかれ、資金や油米等の面での官僚的國家權力への依存性を絶ち切れなかつたこと（先出王大岳の文章參照）及び頭人集團と結合しなければならなかつた事と密接につながつていよう。

次に、商品生産者であつたという事から、爐戸と同様の

企業上の危険が不斷に伴つていた。先づ、生産諸資材、とくに油米の缺乏と昂騰は、絶えず、彼らの企業にとつて大きい脅威であつたが（前引王大、岳参照）、とりわけ、数多い小廠——たとえば「既無資力深開遠入、僅就山膚尋苗。……一引既斷、又覓他引。一處不得、又易他處。往來紛藉、莫知定方」と稱された（王大岳参照）雲南の青龍山、日見訊等々の資力に乏しい小商品生産者達は（前掲王氏、論文参照）、商品生産者であるが故に背負わねばならなかつたリスクによつて、一層しばし、衰退——没落の過程を辿らねばならなかつた（なお本章註脚楊照）。そして、これら小商品生産者達は、生産手段の喪失——プロレタリアート化を來したに違ひなく、先述した賃労働雇傭に基づく企業家の形成過程と考え合すなら、採掘業者——鍋頭層内での階級分化の進行を意味しよう。更に、商品生産者たる彼らの間には、當然、不斷の生産競争があり、それが亦、鍋頭層内に苛烈な階級分化を進めたと考えられる。たとえば、一つの鑛藏を、上下乃至左右の兩側から掘り進んで、兩者の間に鑛石を奪い合うはげしい争い——「爭尖奪底」とよばれた——が「廠所常有之事」としてくりひろげられた。そして、この争いは、客長・硯長ら頭人によ

つて調停されたが（表三）B、5・11）、元來、國家權力と結合しつゝ優良鑛區を獨占した私的官僚資本、豪強富戶資本と、權力の背景を持たない弱少鍋頭層との間に階級的隔りが激しかつた事から推して、この生産競争は、常に前者の勝利に歸したであらう事が推測され、それを通じて、衰退乃至没落に向う鍋頭層と、生産規模を擴大し、且つ、資本を累積して行く鍋頭層への分解が進んだと考えられる。

先述の、清代社會そのものの分解——賃労働の析出過程と、今述べた採掘業内の階級分化の進行は、だが、同時に賃労働をふまえた巨大鍋頭層自身の矛盾の激化を意味する。

弟兄達は、坑内採掘夫（鑛手、斬手、鎚手）、鑛石運搬夫（背挑）、坑内通風夫、排水夫、坑外雜役等に分れ（表三）C 4・9・11）、彼らの分業に基づく協業によつて、採掘労働が遂行されたが、この労働過程を、鍋頭は、強固、且つきびしい縦の職制によつて、管束した。即ち、「管事管鑛頭、鑛頭管領班、領班管衆丁、遞相約束、人雖多不亂」と云われる組織がそれであり、而も、これら管事、鑛頭、領班は、いづれも、單なる頭人でなく、吾々が先に見た如く、頭人層の下降的分解による「丁」「雇力」即ち、鍋頭——投資者

集團の被雇傭者であつた。とりもなおさず、これら職制の採用は一般弟兄の賃労働化に對應した、鍋頭達の新しい取組組織の形成を意味しよう。職制による弟兄取奪は、湖南でも、ほぼ同様であり、「客商―坑頭―坑夫」の縦の支配が貫徹し、或いは、十五人一組の採掘労働者の日々の生産労働を、夫長や代頭が「看守」した。そして、砂丁の賃金は、日に錢數十文という低さであつた。その上、弟兄達の日々の労働條件は苛酷を極めた。

雲南銀山鍋頭の、登仙にもまさる成功を記した同じ王荃は、坑内で泥まみれになつて排水作業に従う砂丁を「拉龍之人、身無寸縷、蹲泥淖中、望之似土偶」と語り、息苦しい坑内で採掘する砂丁の惨状を「釋氏所稱地獄、諒不過是」と語っている。硿が深くなれば、積水によつて坑盤が陥没し（浮硿という）、「悶死」する労働者が数人から數十百人に及ぶのが常であつた。坑内の火災も多く、「烟斃人命、動以百計、尸親婦女環哭遍野……」という惨状があちこちに見られ、而も平素きびしく彼らを重労働に狩りたてる職制達は、かゝる事故のときは逃げ隠れ、否、一般に「礦廠法死者主人不問」、つまり、砂丁は全くの死に損であり、生

命の危険に對してさえ、何の保證もされていなかったのである。不時の災害だけでない。陝西省石炭業の事例だが、か弱い幼年工が苛酷な労働によつて、しばしば生命を失う程酷使された。坑外に礦石を背負い出す婦人労働者も、きびしい重労働に喘いだ。早く、康熙三年、廣東省嘉應州知州劉駿名は、

「見婦女絡繹負礦」と題して

居無寸藝足畏昏。逋賦新租兩覺門。

野婦起呼各努力。呻吟道左不堪聞

と唱い上げている。納め切れぬ舊賦の上に新租が重なり、鑛業労働者となつた婦人は、道に呻吟しつゝ鑛石を運ばねばならなかつたのである。

華衮も及ばず、登仙にもまさると唱われた鍋頭達の榮譽と巨富は、以上の如き職制支配と苛酷な條件の下での、重労働、低賃銀の上に築かれたことを想わねばならぬ。月活形態の誕生は、たゞちに労働者の天國を決して意味しない。それ故に亦、「商」乃至鍋頭、及び頭人集團、そして被雇傭の職制達は、弟兄達のはげしい、組織的抵抗に直面せざるを得ない。「圖略」は弟兄達の抵抗が常に、秘密結社組織

を取つた事について「諺曰無香不成廠。或結黨而後入。或遇事而相邀。其分也爭爲雄長、其合也必至挾持」と傳え、林則徐も亦、その抵抗が「燒香結盟」形式であつて、「併力把持、……漸而抗官藐法。是以有曠之地、不獨官懼考成、並紳士居民、亦皆懷然防範」というはげしいものである事、及び、頭人や廠員によるきびしい取締が必要であることを力説している。弟兄達の秘密結社の抵抗組織が無ければ、廠が成り立たないという事實が諺化していた程、弟兄達の抵抗とその組織は普遍的であり、亦、彼らの斗いは、鑛場監督官員のみならず、一般の紳士をも恐れしむる程の力となつていたのである。そして、そのエネルギーは、雲南の場合には、とくに漢、回という民族的矛盾と複雑にからみつゝ、咸豐五年の回教徒大叛亂勃發の直接原因となつて發火するし、湖南では、太平天國への彼らの参加と活動となつて爆發する。弟兄達は、個々の官商や、鍋頭や、頭人集團の、職制的重壓に徒らに屈伏しなかつただけでなく、そうした鑛業内生産關係の枠を越えて、清朝國家權力そのものに對決するエネルギーを凝集しつゝあつたのである。

それ自身、複雑に分解しつゝあつた頭人集團と結合し、

弟兄に君臨していた「商」や「鍋頭」層は、自らの收取關係の中に、怖るべき矛盾を内包していたと云わねばならない。

而も、個々の鍋頭層の間に、或いは、弟兄との間に内包していた諸矛盾とならんで、鍋頭層は、更に大きな對立物に直面しなければならなかつた。云うまでもなく、それは、清朝國家權力そのものである。

吾々は、銅・鉛鑛業生産關係を構成する諸要素、即ち、

「商」乃至「鍋頭」「頭人」「職制」弟兄

「爐戸」「爐」

の、夫々につき、亦、それら上下の相互關係について通觀して來た。だが、これら夫々の諸要素間の横の、或いは諸要素相互間の縦の諸矛盾の中で、主要な矛盾は何であり、その主要矛盾との關係において、鑛業生産關係がどう分解し、展開したかという點については、問題を殘して來た。その問題——國家權力に對する鑛業構成諸要素の對決の問題は稿を改めて考察しよう。

註

(1) 廠衆有硃民・爐民・商民之分。硃民之中、大抵出資購備油米

者爲鍋頭」「圖略」所收「附銅政全書諮詢各廠對」。亦、本章註(3)參照。管事については、「表三」、A、9、C、11、參照。

礮戸・尖戸については、「表三」B、10の史料參照。

(2)成案「卷十四」「飭查桂廠白鉛黑鉛及綠紫矸石壁下等處一切偷漏各條」「頭人」、「商」が投資者の場合は、夫々「夫長」、「商」とよばれた。

(3)「雇力稱礮戸曰鍋頭、礮戸稱雇力曰、弟兄……」「圖略」丁第九及び前掲「表三」C2、及びC3。

(4)「表三」C4參照。

(5)「表三」C6・8・9參照。

(6)成案「卷十一」卷十八の各史料參照。なお、湖南では「弟兄」の呼稱のあることを知らない。

(7)「圖略」「礮之器第三」。

(8)「硃批」楊文乾、雍正3年12月10日の條に「廣州府龍門縣上坪山、有礦徒三百餘人。帶有風箱器械、潛來偷挖」とあつて、集團的礦徒が、風箱などの生産手段を持つて私挖しているが、廣東省の礦徒は、その資本を、豪強から提供されるのが常であつたから——拙稿(1)——風箱も亦、資本投資者によつて、恐らく鎖徒の指導者に提供されたのであろう。

(9)拙稿(1)參照。

(10)王荪「鑛廠採煉篇」

(11)優良鑛山が官僚權力で奪われたり、私的經營が武力で驅逐されたような事例(既述)は、鑛藏の私的所有が、完全に確立していたとは云い難いことを示している。しかし、拙稿(1)三十六頁に示した諸事例や、私的契約による投資股份の添入權退出權が確

立していたこと——「圖略」規第十一——などの事實は少くとも、鑛藏の私的所有が確立の過程にあつた事を物語つてゐる。

(12)本章前註(1)參照。

(13)前掲、乾隆31年、楊應瑞上奏及び、王大岳「論銅政利病狀」など參照。そして、米の供給を官憲に仰がねばならぬことによつて、彼らの官憲への從屬が強まる。

(14)前引、倪銳「復當事論廠務書」

(15)「合夥開礮、謂之石分。從米稱也」——「圖略」丁第九

(16)「圖略」規第十一

(17)前引「圖略」所收「附銅政全書諮詢各廠對」

(18)「凡廠之初開也、不過數十人裹糧結棚而棲曰伏房。所重者油米……」——王荪「鑛廠採煉篇」——

(19)前註(17)參照

(20)乾隆18年12月11日布政使周人駿の詳文——「成案」卷十四、「飭查桂廠白鉛黑鉛及綠紫矸石壁下等處一切偷漏各條」——

(21)拙稿(1)では、この權書を、鍋頭が爐戸に賣る礦石の量と價格を計算、報告するものと解釋したが、「賑簿」は給與簿であり、個々の弟兄の採掘量を記入し、そこから、個々の支拂額を決定するための帳簿であらう。従つて權書の役割は爐戸に對する仕事ではなく、個々の弟兄への賃銀支拂の基準を決定する所にあつたと思う。

(22)前註(17)參照

(23)これについては別稿參照

(24)白壽彝氏前掲論文參照

(25)前註(17)

(28)「表三」C・6・9の示す鞭打ち支配は月活形態の労働者も免れ得なかつたことを語ると思われる。

(29)前註(28)の史料、及び、「成案」卷十二「辦理礦廠各條規」

(30)「硃批」李萬倉の項

(31)前註(29)「辦理礦廠各條規」

(32)「硃批」李萬倉の項参照

(33)本文に引いた外、「硃批」の以下の各項を参照。—アラビア數字は夫々、年月日を示す—孔毓珣2・9・8、5・9・29。石禮哈5

閏3・10。李紱2・8・4。武格7・4・8。樓儼7・閏7・4。王士俊6・12・10。王紹緒7・8・6。憲德8・1・22。焦祈年9・6・

29。李如相11・3・25。阿克敦5・3・22。鄂彌達9・2・10。10・

6・9。13・3・15。趙弘恩9・7・3。10・閏5・7。黃廷柱7・11

・16、8・正・18。

(34)拙稿(1)参照

(35)同志卷二十貨殖

(36)「圖略」丁第九

(37)前引「圖略」「附銅政全書諮詢各廠對」

(38)王荪「鑛廠採煉篇」

(39)前掲「桂陽直隸州志」卷二十貨殖には「採鑛」による致富者、

鄧、曹、彭氏について傳え、とくに何植茗の致富狀況に詳しい。

(40)前引乾隆31年雲貴總督楊應琚の上奏は、數年經營して利が無いと、「有米の家」に出かけて資本を加借、先の欠損を挽回しようとするが、「碾米」とも烏有に歸し、鑛山監督官から高利の銀米を借らねばならなかつた多くの小企業について述べている。湖南については、たとえば「民自采礦、富者破家、貧者斂力。…

…」(先引「桂陽直隸州志」卷二十貨殖)「(乾隆四十七、八年の頃、桂東縣の錫鎮に對して)桂陽州譚某長沙周某、各挾重資來桂東承商。慇懃富戶、合夥開採。…始在檀樹瀾創試無獲、繼在白竹創試…皆無獲。二三年間、喪其資。譚・周負債而逃。張某氣鬱而死。即邑富戶某亦爲此破家…」桂東縣志」卷八、物產志—

(41)「圖略」禁第十二及び王荪「鑛廠採煉篇」

(42)拙稿(1)参照

(43)「圖略」規第十一

(44)「表三」C、11、及び「圖略」丁第九

(45)嘉慶重修「郴州直隸州志」卷十九鑛廠は宜章縣錫鑛山經營の失敗を記したあと、「抗夫則欠抗頭、抗頭則欠客商、訟獄彌年而家由此破」と傳えているのは、平素から、客商—抗頭—抗夫の系列で抗夫支配が貫かれていたことを示す。

(46)「成案」卷十四、「飭查桂廠白鉛黑鉛及綠紫矸石壁下等處一切偷漏各條」

(47)郴州。金石土木、鮮土著、多異境人。凡工作日給錢四十文。傭田者亦然」前掲「郴州直隸總志」卷二十一、風俗—亦、前掲

「桂陽直隸州志」卷二十貨殖は、貧家に産れた劉承高なる者が佛山鎮で、數十萬の巨資を擁する大商人になつた過程を傳える中で、彼が貧しかつた頃、その父が「爲礦夫挑沙、日得數十錢」と記している。

(48)王荪「鑛廠採煉篇」

(49)前引「桂陽直隸州志」卷二十貨殖

(50)「郴州」拜家河地方、向產煤炭。…有誘逼幼童下井挖炭之事。斃者甚多」前掲「中國近代手工業史資料」第一卷三三〇頁、4

「陝西的採煤業」

64 乾隆「嘉應州志」卷十一、平遠縣藝文、詩

65 「圖略」禁第十二

66 林則徐、前引、奏稿。

67 これは大問題であるが、當面、矢野仁一博士「近代支那史」

（昭和2年9月）
（弘文堂、再版本）第十八章「雲南回教徒（パンツェー）の亂」參照。

補註

(1) 蔡毓榮「籌滇十疏」——師範纂「滇纂」卷八ノ三、藝文所収——

(2) 「走廠之人、率以此時（三節端午・中秋・年終）來廠。大旺則開風隨時而集。平廠一經過期、便難招募也」——「圖略」規第十一——

(3) 「廣示招徠、或本地殷實有力之家、或富商大賈、悉聽自行開採……嚴禁別開官洞。……蓋官開則必派取民夫。民開則自雇覓礦夫。民夫各有本業。或力不能深入。礦洞往往半途而廢。且恐派夫擾民。朝廷未見其利而地方先見其害也」——補註(1)參照

(4) 「硃批」廣西提督田峻の項參照。

（一九五八年四月廿六日脱稿）

〔附記、本稿は文部省昭和26年27年度の個人研究費及び昭和卅二年度綜合研究費——雍正時代史研究——による成果の一部である〕

東洋史研究バックナンバー在庫品

九卷三號・十卷六號・十一卷三號・四號（特集 東洋史上の都市） 五・六合併號 十二卷一號・二

號・四號 十三卷三號・四號・五號・六號 十五卷

一號・二號・三號（以上各號一冊二百圓） 十五卷四

號（特集 雍正時代史の研究）（三百圓） 十六卷二

號（一三〇圓） 三號（特集 新中國の考古學）（一

五〇圓） 四號（特集 雍正時代史研究）（二五〇圓）

殘部僅少の號が多いので、御希望の方は至急お申し込み下さい。送料は本會が負擔致します。

東洋史研究會

出典	投資家	頭人	勞働者	備考
① 正統此批旨	廟頭 令本處保正頭目并羅募爐頭・廟頭、 廟頭…… 廟頭…… 廟頭……	廟頭 令本處保正頭目并羅募爐頭・廟頭、 廟頭…… 廟頭…… 廟頭……	弟兄……挖者背荒者爲弟兄	立品鑛數目。每十鑛、鑛頭一分、 弟兄四分、鑛頭五分。抽稅每兩一 錢。
② 府安臨	鑛頭……供油米者	鑛頭……鑛頭者爲鑛頭。以洞中富路用木鑛之、 幼其廟頭。故曰鑛頭。	弟兄……挖者背荒者爲弟兄	其洞內或開一二尖、或開四五尖。 或一尖獲鑛而傍尖皆未獲鑛、鑛頭 同供者亦同分之。鑛頭僅獲鑛之尖 得與其列。傍尖之鑛頭不得過而問 焉。如同鑛頭不在此尖內、亦不能 分此鑛。至品鑛數目、每十桶鑛頭 一分、弟兄四分、鑛頭五分。鑛頭 又於五內之內按分均分。此採鑛之 定例也
③ 縣自蒙	鑛頭……發油米者	鑛頭……鑛洞者	弟兄……挖土開荒者	(上課分を除いて) 鑛頭・鑛領……………一分 廟丁……………無定數共得三分 廠客……………六分
④ 倪復當務	米分廠客 (拙稿(1)及び本 稿七五頁参照)	廠官 課長 鑛頭 鑛領	廟丁	
⑤ 張南	鑛頭……司飲食者 客長……廠衆推老成一人宛客長。立規最嚴。 犯者受其責辱。……常有東西異錢打 入、共得一砵者必爭。經客長下視、 定其左右。兩比違約釋競。 廟頭……架鑛木者			
⑥ 檀海	以七長治廠事 鑛頭……掌役食之事 課長……掌稅課之事 客長……掌資客之事 炭長……掌薪炭之事 爐頭……掌爐火之事 洞長……掌硝洞之事 鑛頭……掌鑛架之事		砂丁……皆聽治于鑛頭。其答以荊 曰條子。其縛以鑛曰槍。 其法嚴其體肅。	
⑦ 大王	客長……廠民得礦、皆由客長平其多寡、輸錫 頭鑛房。 錫頭……因其鑛質、幾幾幾揭而成錫。 (但し、雲南の青龍山などの小廠のこと。) 本文九十頁参照		砂丁……出荒負礦者 推手……採礦破甲者	一爐之內二十勛納官。酬客長錫 頭幾勛。
⑧ 倪復	鑛頭……一廠之中 出資本者	管事……司庶務者 鑛頭……安置鑛木者		
⑨ 王	管事……主廠者曰 管事。出 資本募功。	工頭……督力作者 監班……比較背荒之多寡者	砂丁……一人掘土鑿石、數人負而出 之。用鑛者曰鑛手。用鑛者 曰斬手。負土者曰背荒。統 名砂丁。其刑有答有縛。其 答以荊曰條子。其縛以鑛曰 槍。繫兩掛懸之梁棟。其法 嚴其體肅。	
⑩ 徐開	鑛頭……一廠之中 出資本者	管事……司庶務者 鑛頭……安置鑛木者		
⑪ 南	鑛頭(鑛戶) 雇力稱鑛戶曰 鑛頭。出資購 備油米者。	書記……杜儉匪漏課、並禁奪底爭尖。 巡練…… 課長…… 客長…… 炭長…… 爐頭…… 洞長…… 鑛頭…… 鑛領…… 皆所以約束鑛戶尖戶及鑛丁砂丁類。	弟兄……鑛戶稱雇力曰弟兄。 管事……經營工本、置辦油米一切什 物。 鑛書……(監班書記)獲鑛方履。每洞 一人。旺洞或有正副。每日 某某買鑛若干登記賬簿。開 呈報單。 鑛頭……每洞一人。辨察鑛引、視驗 荒色、調設鑛手、指示所向。 鑛境則支設鑛木。閃亮則安 排風櫃。有水則指示安龍。 得鑛則鑛定賣價。凡初開鑛、 先招鑛頭。如得其人、鑛必 成效。 領班……專督衆丁…… 鑛手……專司持槌…… 背坑……專司運出鑛石 親身……當時並無身工。得鑛共分餘 利。 月活……不論有鑛無鑛、月得雇價。 鑛頭……熟識鑛性、諳練配煎、守視 火侯。無論銀鑛、鑛戶之虧 成在其掌握。…… 草皮活……鑛之外雜事皆係月活	
⑫ 南湖	砂戶(夫長)	夫長 代頭 鑛頭	砂夫人(砂夫、砂丁)	

Ho-pen (合本) or Joint Stock in the T'ang-Sung (唐宋) Period

Kaisaburo Hino and Yasushi Kusano

Two-man joint stock business organization can already be found in the early Spring and Autumn period in the 8-7th centuries, B.C. In the T'ang-Sung period we find joint stock organizations invested and run by more than two men as well as those which included investors not participated in management, while in the Sung period there emerged the kind of organization where investment and management were completely separated. In this period joint stock enterprise was found in such lines of business as money-lender, pawn-shop, rice-pounder, and trade and commerce.

Copper and Lead Industries in the Ch'ing Period

Hikoshichiro Sato

The productive relations in the copper and lead industries in the Ch'ing dynasty were much complicated; there were mine- and refinery-owners, each of them being differentiated into the small producers' and large enterprisers' classes. In Hu-nan (湖南) province there were powerful chartered merchants, who were privileged to exact license fees from the producers of copper and lead, and the producers were put under the control of these chartered merchants. In Yün-nan (雲南) province, where this system was undeveloped, the unofficial t'ou-jên (頭人) played the rôle of chartered merchants, creating conditions unfavourable for the development of modern mining industry. However, neither the chartered merchant nor the t'ou-jên was a mere agent of the government or a parasite on mining industry; he had already grown an enterpriser himself. The present paper is intended to give a concrete view of the historical rôle of each of the factors of production and productive relations thereof, while an attempt is made to elucidate the structure of mining industry and its inherent contradictions in this period. In view of the fact that the transition of mining industry from government to private enterprise and the

origin of modern capitalism in China have recently been taken up anew, the author intends to present certain premises indispensable to the understanding of the problem.

The Origin of T'u (圖) as Administrative Unit in China

Shizuo Sogabe

In the literature of Ming and after, we often meet with the word t'u in the sense of administrative unit. It has hitherto been said that t'u has its origin in the li-chia (里甲) system, which was set up by the Ming, when one hundred and ten households were designated as unit of local administration, and put in the map. Hence, the unit itself came to be called t'u. But this system seems to have already been in existence in the Southern Sung period; we find the expression, "a certain t'u, a certain tu (都)," in Vol. 99 of the Collected Works of Chu-tzu (朱子). This shows that in the administrative system of his period t'u meant hsiang (鄉), which was on a higher level than the administrative unit, tu. In the Southern Sung period the cadastre called yü-lin-t'u-ts'ê (魚鱗圖冊) was in use with hsiang as unit. Since a map was appended to it, hsiang came to be called by the name of t'u.